

第 3 章

本会議・サイト活動

東京	26
秋田	35
広島	48
京都	59

東京サイト

7月25日～8月2日

サイトコーディネーター

高井竜輔 三窪英里 Hiroyuki Miyake Brian Miller

東京サイトスケジュール

- 7月25日(水) 日本側参加者 直前合宿
- 7月26日(木) アメリカ側参加者来日
ジョイントオリエンテーション#1
- 7月27日(金) 開会式兼外務省主催レセプション
世界銀行環境マルチラテラルフォーラム (世界4カ国同時テレビ会議)
- 7月28日(土) ジョイントオリエンテーション#2
スキット上演
分科会活動
Amedele Led Project “Capture the flag”
- 7月29日(日) 分科会活動
リフレクション
- 7月30日(月) 分科会フィールドトリップ
アメリカ大使館主催レセプション
VISA International Asia Pacific Ltd. 訪問
スペシャルトピック
- 7月31日(火) アジアユースフォーラム
- 8月1日(水) 文化体験企画
東京都内観光
- 8月2日(木) 横須賀米海軍基地 訪問
横浜中華街 観光
- 8月3日(金) 秋田サイトへ出発

東京サイト理念

江戸開府から四百余年。1200万の人口を擁する巨大都市に成長した東京は日本の政治・経済的中枢であると同時に常に新しい文化の発信地であり続けてきた。米国を始めとする各国の企業、公館、国際機関が集中する世界有数の大都市である一方、浅草・上野に見られる情緒溢れる古き良き日本の一面をも残す。東洋と西洋、歴史と現在、そして未来。様々な人種と価値観が交錯するエネルギッシュなこ

の街で、第59回日米学生会議全体の理念であるグローバルパートナーシップの構築に向けた前進を図る。

東京サイトの目指すもの

サイトコーディネーターとして、東京サイトで達成したい目標は三つあった。

まず、政治・経済・文化、それぞれの分野で日本の「一流」に触れること。大使館訪問で政治に、企業訪問で経済に、伝統文化体験を通じて文化に触れる。フォーラムやフィールドトリップの機会を通じて、国際社会に山積するグローバルイシューと、その解決に向け自分たちに何ができるか考える。分科会活動の充実を図るとともに、本会議全体のテーマである次代の創造へ向けた足がかりを提供できたと考えていた。

次に、第一サイトとしての役割があった。例年、会議序盤のサイトでは日米両国のデリゲートが親睦を深める機会に恵まれず、互いの交流が進みづらいという問題点が指摘されてきた。そこで今回の東京サイトでは分科会の枠を超えて、ヴァーバル、ノンヴァーバル両面でのコミュニケーションの機会を拡充することでこの解消を図った。前者はスペシャルトピックや、フォーラム前のスモールディスカッションという形で、後者はALPや観光体験でプログラムに落とし込んだ。

最後に、これは主に日本側のデリゲート向けであるが、東京や日本について、新たな発見のある東京サイトにしたかった。いつもの東京の町並みも、JASCerと一緒に歩くと全く違って見えてくる。普段何気なく生活する中で見落としがちな「日本」や「東京」について、その来し方行く末を見つめなおし、再考するきっかけとなれば、日本側参加者にとってもきっと得るものがあるに違いない。

参加者の皆にももう一度感謝を。どんなに趣向を凝らしたプログラムという名の箱も、参加者皆の協力とインスピレーションがなければ輝かない。本当

にありがとう。そして願わくは、東京の、59回会議の思い出を一人でも多くの周囲の人に伝えて欲しい。内にあるのは参加者同士の信頼が、外にあるのは会議の成功となり、JASCの社会的評価と信用の向上につながっていく。次回以降の日本開催も、成功しますように！
(高井竜輔)

直前合宿

7月25日 日本側直前合宿

全国各地に住む日本側参加者がこの日、国立代々木オリンピックセンターに集合した。全員が集まるのは5月に行われた春合宿以来のことであり、それぞれ再会を喜び合った。スキット（異文化紹介の寸劇）の練習やこれから始まる英語漬けの毎日に備え、分科会ごとに英語でのプレゼンテーションを準備した。明日にはアメリカ側参加者が到着し、本会議が始まるという信じがたい現実不安と期待の入り混じった様子であった。

7月26日 アメリカ側参加者来日 ジョイントオリエンテーション

午後6時半過ぎ、成田から36名のアメリカ側参加者を乗せた大型バスが到着した。プレゼントである手作りの扇子とネームカードを持ち、まずは自分のBuddy探し。日本でもアメリカでもない特別な空間がそこには生まれ、新しい出会いとこれから始まる1ヶ月に期待で胸膨らませることとなった。



アメリカ側参加者が到着し、59回会議が幕を開けた

夕食後、初めて一同が大きな部屋に会してジョイントオリエンテーションが行われた。アメリカ側参加者の長旅の疲れを考慮して、実行委員の自己紹介やグラウンドルールなど最小限必要なことのみを共有し、本格的なプログラムが開始される明日に向けて調子を整えた。



ジョイントオリエンテーションでの実行委員

7月27日 開会式兼外務省主催レセプション 世界銀行環境マルチラテラルフォーラム

第59回日米学生会議の開催に伴い、ご協力いただいた方々をお呼びしての開会式が東京プリンスホテルで行われた。開会式は本会議開催直前に他界されたJASC アルムナイの宮澤喜一元首相への黙祷に始まり、主催団体の大井理事長や後援者の方々からお言葉をいただいた後、日本側実行委員長の川口耕一郎と米国側実行委員長のMorgan Swartzがスピーチを行った。外務省主催によるレセプションも同時に行われ、文化交流部部長の山本忠通氏からお言葉をいただいた。外部に対して開会を宣言することで、JASCが社会と深く結びついていることを感じ、JASCerとしての自覚が芽生え始めることとなった。



開会式・外務省レセプションの様子

第3章 本会議・サイト活動

その後世界銀行東京事務所の協力を得て、世界環境マルチラテラルフォーラムを行った。環境というグローバルな問題に対して、世界において特別な地位にある日米両国がどのように働きかけるべきかという問題意識の下に行われたこのフォーラムは、第59回会議のテーマである「日米によるグローバルパートナーシップの探究」を最も明確な形で体現することとなった。



真剣な表情で聞き入る参加者たち

【世界環境マルチラテラルフォーラムを振り返って】 第59回日米学生会議アメリカ側実行委員 三宅博之

日米の参加者が合流した翌日、開会式の直後に世界銀行東京事務所の一室を借りて世界環境フォーラムを開いた。フォーラムは三部構成だった。学生会議参加者によるスモールグループディスカッション、三人のパネリストを招いてのパネルディスカッション、そしてガーナ・フランスの学生との同時テレビ中継会議だ。

学生会議参加者によるスモールグループディスカッションでは、7つのテーマを設定し、そのテーマに沿って日米学生で議論をした。テーマは環境法からフェアトレード、バイオエネルギーの活用など多岐に渡り、「政府はいかに法を使って持続可能な社会を実現できるか」や「次代の環境保護のフレームワークは京都議定書のものを踏襲すべきか」などといった問いに対する答えが模索された。

第二部では、環境省の小林豪氏、国際NGO・Conservation Internationalの日比保史氏、そして千

葉大学の上村雄彦准教授からお話を頂いた。小林氏は環境問題全体を見渡した後、京都議定書の現状と未来、そして日本の問題解決に対する取り組みについて解説された。日比氏はバイオダイバーシティの重要性と、それがいかに危機的状況にあるかについて話してくださった。上村准教授は環境税やグローバルな税金による問題解決法について持論を展開された。それぞれ政府、NGO、学会という立場ならではのお話だったと思う。

学生も交えた質疑応答では、「先進国か発展途上国か、どちらに焦点をあてて問題解決を図って行くべきなのか」、「バイオダイバーシティのhot spotsのインバランスを指摘されたが、どうやってそれを再配分すべきか」など、学生から積極的な質問が出された。

第三部は日米学生によるプレゼンテーションで幕を開けた。Samantha Scullyと武田尚樹がそれぞれ、自分や自国の環境に対する配慮や、今後の改善点についてスピーチを行った。すべてのアクターが共有財産の為に努力しなければならない、環境に配慮した行動を習慣化せねばならない、などマクロ、ミクロ両視点からスピーチが展開された。その後、テレビを通じてフランスの学生によるプレゼンが行われた。「フランスの優れた環境技術や原子力発電の活用を例に挙げ、生活の質を犠牲にする事なく技術によって環境問題を解決して行くべきだ」、といった主張がなされた。最後のプレゼンはガーナの学生によるものだった。自国の森林破壊などの問題を挙げ、NGOなどの積極的な参加、イニシアチブを求めた。その後全員を対象とした4カ国同時テレビ会議が行われた。「日米ではどのような問題が重用視されているのか?」「核エネルギーに関してどう思うか?」「京都議定書に関してどう思うか?」最初はお互いの距離や違いを意識した質問が出たり議論されたりしたが、最終的には日米・フランス・ガーナの学生たちの意識に大した差はないように見受けられた。すべてのアクターが行動しなければならないこと、現在の取り組みでは不十分である事など、現状に対する認識では一致できた。

会議初日から、四時間以上に渡る長いフォーラム

があり、参加者たちもさすがに疲れていたようだが、この数時間のうちに得られたものは大きかったと思う。

【参加者後記】

小議題はJASCで初めてマネージするディスカッションテーブルだった。英語で議長をやるのは初めてだったが、パネリストも務めるサマンサや最初に仲良しになった“BRachel” (Brad & Rachel) が積極的に発言してくれて助かった。日本人だけの議論なら日本語でも沈黙が訪れていたなと考えると、JASCersに頼もしさも覚えた。同時にアメデリの大半がリベラルであることも知った。

パネルディスカッションはレベルが高く、英語についていけない所も多々あったが、同時にJASCで楽しみながら頑張れることのありがたみも再認識した。
(加納康宗)

【世界環境マルチラテラルフォーラム：第1部ディスカッションテーマとリーダー】

- ・先進国と途上国の環境への意識の差異 上田 来
- ・ボーダレス化する世界でどのような環境対策が求められるか 加納康宗
- ・バイオ燃料と食料 金 大鐘
- ・二酸化炭素排出権 古屋佑樹
- ・環境法 李 凌叡
- ・CSR と環境 武田尚樹
- ・フェアトレードと環境 伊関之雄

7月28日 スキット上演 ジョイントオリエンテーション 分科会

“Amedele Lead Project” Capture the Flag”

7月28日土曜日、快晴。来日以来のハードなスケジュールも一段落し、参加者同士の本格的な顔合わせの機会となる日米ジョイントオリエンテーションが行われた。各自が会議に対する抱負を混ぜながら自己紹介した後、パディ同士がプレゼントを交換。続いて日米のグループに分かれ、互いの文化を演劇形式で紹介しあうスキットエクステンジとなった。アメリカ側は、テレビのショーやアメフトなどの現代米国風俗をコミカルに表現し、日本側は電車内の風景や秋葉原のオタクカルチャー、ビリーズブートキャンプを取り上げ笑いを誘った。こうした作

業を通して、ひと夏を共に過ごす仲間たちの間に、少しずつだが親近感が芽生え始めた。



◀日本側スキット的一幕、本格的なアキバポーズ

アメリカ側スキット的一幕、ロックスターの誕生



昼食後は分科会に分かれ、最初の分科会セッションが行われた。自己紹介や各自が興味を持つ分野を共有したり、早速ファイナルプロジェクトに向けて話し合うグループもあった。



藤原教授を迎えて

RTで頭を使った後は、ALP (Amedele Lead project) で身体を使う時間となる。参加者は運動に適した服装に着替えて代々木公園に移動、日米混成のキャプチャーザフラッグが戦われた。思えば事前準備段階からキャプチャーザフラッグに寄せる相手Brianの気合は並大抵ではなく (Yoyogi Parkの様子をgoogle mapで調べたんだが、なかなか良さそ

第3章 本会議・サイト活動

うな場所だな、Ryusuke!)、日米の参加者が英語で檄を飛ばしあいながら真剣にゲームに興じている様子は、会議全体の理念である“Global Partnership”の萌芽を感じさせるのに十分であった。



Capture the Flagの合間に

7月29日 分科会リフレクション

分科会の時間が中心となったこの日、暴力と平和分科会では東京大学の藤原帰一教授を、アイデンティティ分科会では青山学院大学の押村高教授を招きレクチャーを受けた。専門家の話を受けて知識を深め、自由に日ごろ抱えている問題意識を問うことができたほか、他の分科会メンバーも各レクチャーに参加したため、議論がより活発になり充実した分科会活動となった。

その後、まだ慣れない環境への不安を共有しやすくするために、日米別のリフレクションミーティングを行った。日本側では、英語へのストレスを軽減させお互いに理解を助けるための工夫や、ホスト国参加者としての意識を持ちアメリカ側参加者をケアするべきといったような意見が交わされ、生産的なミーティングとなった。

7月30日 分科会フィールドトリップ アメリカ大使館主催レセプション

VISAビジネストリップ スペシャルトピック

午前中は、分科会ごとに靖国神社や放送局、NPOなどそれぞれの分科会テーマに関連する場所を訪れ、教室での議論を超えた新しいインスピレーションを多く得ることになった。

午後はアメリカ大使館にて政治、経済、環境、科



靖国神社を訪れたJASCer

学技術、広報など多岐にわたる分野の大使館の職員の方々7名からブリーフィングを受けた。質疑応答の時間には活発なやりとりが交わされ、中には核兵器に対するアメリカの姿勢を問う学生もいた。その後軽食を取りながらの大使館職員の方々との交流会はよりカジュアルな雰囲気で行われ、外交や国際問題を仕事にすることについて、目を輝かせながら自らの将来と照らし合わせて熱心に話を聞く参加者の姿が印象的だった。

その後VISA International Asia Pacific Ltd.で井村牧氏の協力の下、Vice PresidentのJim Allhusen氏から日本、世界でNo.1のシェアを誇るVISAブランドについて、また日本人とアメリカ人のマナーカルチャーの違いについてレクチャーを受けた。身近にあるVISA cardがnon profitの会社であることに驚きを覚える参加者が多く見られた。日本で働くことを夢見るアメリカ側参加者にとっては特に、日本経済の中心である丸の内での日本の外資系企業を知ることになり、非常に有意義な経験となった。



国際ビジネスの最前線に触れる

その後は、各グループに分かれてスペシャルトピックを行った。スペシャルトピックとは、参加者が好きな話題を設定してグループをリードし、食事を取りながらリラックスした中で行われるディスカッションである。多忙なスケジュールの一日であったにも関わらず、「両国の高等教育」「イラク戦争」「日米間に見る恋愛観の違い」など思い思いのグループで楽しむ様子が見られた。

7月31日 アジアユースフォーラム

7月31日火曜日、晴れ。アジア財団との共催となるアジアユースフォーラムが行われた。フォーラムでは北東アジアの歴史問題と若者の果たすべき役割というテーマの下、東京大学の姜尚中教授と、テンプル大学のジェフ＝キングストーン教授による基調講演に加え、日米中韓4カ国の学生によるパネルディスカッションが行われた。JASCからも日米各2名のデリゲートがパネリストとして参加し、会場参加者との間で熱心な質疑応答が交わされた。第二次世界大戦に起因する北東アジア歴史問題の現在性と、その解決のため果たすべき学生の主体性という二つの問題意識を学生に喚起する有意義なフォーラムであった。



会場と質疑応答を行う学生パネリスト

フォーラム後はご臨席の高円宮妃殿下を交えてのレセプションが行われた。参加者は訪れた多くのアラムナイや官財界からの出席者から多くの刺激を受ける一方、58回会議の参加者も多数会場を訪れ、59回実行委員にとってはさながら同窓会のような素敵な夜を過ごした。



高円宮妃を迎えてのレセプション

以下アメリカ側参加者代表のパネリストを務めた Joshua Evan Schlachet の感想文を掲載する。

【アジアユースフォーラムを振り返って】

Asia Youth Forum Reflection

The 59th JASC American Delegation

Joshua Evan Schlachet

Participating in the Multilateral Asia Youth Forum was a highly valuable experience for me. Never before have I had the opportunity to learn from such a diverse and insightful group of students from the nations of East-Asia. Though each of us spoke about significantly differing topics, this forum was a new step forward in encouraging dialogue at the level of individual citizens of our respective countries. In an often delicate political climate that is so heavily dominated by the discourse of governments, it was encouraging to see our youth stepping forward to present distinctive and unconventional voices. This program was particularly inspiring in the sense that it highlighted the shared desires for peace, equality, mutual understanding and responsible global involvement that we all possess.

At points during my fellow students' presentations, I could hardly help becoming overwhelmed by the deep convictions for change that we all felt and expressed despite our superficial differences

第3章 本会議・サイト活動

in nationality and upbringing. Such passion for the wellbeing of our planet and its inhabitants, regardless of national identity or ethnicity, clearly exists throughout East-Asia, and will only be fueled and encouraged by events such as this. Never before in my life have I learned so much in five short minutes about a topic, about another person or about myself than I did during the Asia Youth Forum. I believe I formed a deep connection with each of the presenters despite the brevity of their speeches, and such bonds of shared principles form the basis upon which positive change is founded.

The Asia Youth Forum was so significant because it allowed us a platform to offer these alternative views not only to our fellow students, but also to political and business leaders, academics and the general public. The generous patronage of Princess Takamado — and especially her inspiring and heartfelt word — underscored the special significance of such international communication. I sincerely hope that this program can carry on into the future and continue to expand and incorporate new international perspectives. Thank you so much for allowing me to participate in such a worthwhile event.

8月1日 伝統文化企画 東京都内観光

8月1日水曜日、快晴。この日は文化体験が行われた。午前中は江戸切子や屏風作りなどの伝統工芸体験を行うグループと、江戸東京博物館を訪れるグループに分かれ、それぞれ東京の「歴史」や「伝統」を直接学ぶ契機となった。



文化体験・江戸切子を体験する

昼食後は都内自由観光の時間。日米参加者が目的地別にグループを作り、秋葉原やお台場、原宿などで思い思いの時間を過ごした。「自由」観光といっても、JASCのプログラムであることに変わりはなく、日本側の参加者が米国側参加者を迎える「ホスト側」としての自覚を持って観光のイニシアティブをとってくれたことは、実行委員として嬉しい限りであった。



浅草寺の前で

8月2日 横須賀米海軍基地訪問 横浜中華街散策

8月2日木曜日、快晴。東京滞在中も実質最終日となる今日は、米軍横須賀基地への訪問研修が行われた。横須賀基地ではシーファー駐日大使臨席のラン

チをはじめ、係の方による基地と日米防衛交流史の解説、イージス艦への搭乗体験など、多くの貴重な経験を通じ、日米の防衛・安全保障について議論・考察した。

通じ合う心▶



◀日米の安全保障政策について学ぶ

基地での研修後、横浜中華街で夕食となった。日米の参加者は中華料理を堪能しつつ台頭しつつある中国に思いを馳せた。今日で別れを告げる東京サイトを振り返りつつ、出発まで思い思いの時間を過ごした。



東京サイト最終日



中華街を体験するJASCerたち

8月3日 秋田サイトへ向けて出発

秋田サイトへの出発に向け、午前6時半にオリンピックセンターを後にした。早朝の出発となったため前夜は早めにパッキングを済ませて床に就く者、一晩中語り明かす者など様々だったが、10日間の東京サイトを経て、JASCer同士の絆は深まったようだ。

東京サイトコーディネーター後記

三窪英里

日米学生会議73年の歴史の中で、東京は1度を除き常にサイトの一つであり続けてきた。1200万人の人口を抱える国際都市東京は政治、経済、文化の中心であり、日本を語る上で外せないばかりか、会議を行う上で最も多くの可能性が眠る重要な開催地だと認識していた。

第59回会議においては、東京が持つ可能性を最大限に用いることでよりテーマの実現に近づきたいという思いがあった。第59回テーマである「グローバルパートナーシップの探究」の礎となるような幅広い分野におけるアカデミックな刺激に多く触れること、そしてそれらの刺激が参加者の抱える根底の意識を喚起した結果、長期的なタームで人を変え、世

第3章 本会議・サイト活動

の中に働きかけるという意味での「次代の創造」となりえることをめざし、プランニングを進めた。

私たちがコーディネートをする上で、絶対に譲りたくなかったのは、「政治、経済、文化に触れるという3つのうちのいずれも外さない」、「最初のサイトであり、かつ10日間の長丁場であることからイベントを詰めることを避け、参加者同士の心の距離を縮める努力をすること」であった。そしてもう一つこだわったのは日本側参加者の視点だ。アメリカ人にとっては、日本に来て異文化に触れるだけでも最高にエキサイティングであろう。しかしかかにも同数の日本側参加者が東京を日常の風景に感じず、感動を覚えらるるサイトにするかが東京サイトプランニングの上でのキーポイントだと思った。

期待が次々と高まっていく一方で、限られた時間の中でどれだけのパフォーマンスを発揮させるか、ロジスティクスを確実にこなすかということに常に直面しながらのプランニングであった。しかし、東京の仕事であれば言葉のバリエーションも少ないということから、アメリカ側実行委員が大使館へのお願いやビジネストリップの実現のために海の向こうから果敢にコーディネートに携わってくれたことがうれしく、大きなモチベーションとなった。

このような思いをもってサイトを作ってきた私たちであるが、初めて参加者同士が顔を合わせた5月の春合宿後は、実行委員がそれまで作りかけてきた箱を一気に完成へと運ぶことに集中する一方で、ホスト側として日本側参加者が高い意識を持ち、世界銀行フォーラムのスタッフとしてディスカッションリードをしてくれたり、東京観光スタッフとして住み慣れた東京をいかに魅力的にアメリカ側参加者に伝えるかを必死で考えてくれたりと、箱に宝石がちらばめられていくかのように輝きを加えてくれた。

現在、東京サイトを振り返ると参加者同士の相互理解を得た上で、多くの刺激・インプレッションを得てほしいという当初の願いは叶い、初志貫徹ではなかったかと思っている。程よい緊張感の中、学ぶときは全身で吸収し、カラオケや居酒屋ではしゃぐときは思いっきりはしゃぐことで参加者同士がすぐに打ち解け笑顔に余裕を見ることができたこと

は無論、どのサイトよりも多く行われたレセプションやフォーラム、企業訪問などを含めた外部との係わり合いを通じて新たな気づきを得、そこで出会った人々との交流を通して一歩前進するというプロセスを最も多く踏むことができたサイトだったのではないかと思う。「東京で生まれ育ったのに知らないことばかりだった」「東京、すごく充実して楽しかったよ」と感想を漏らしてくれた参加者の言葉も助け、東京サイトは成功したのではないかと感じている。

これも、私たちを支えてくださった多くの方々のご理解、ご支援の賜物に他ならない。時には無理を承知で情熱だけを持って飛び込み急なお願いであったにもかかわらず協力賜った方々、素敵な機会をご提供くださった諸官庁、企業、大使館の方々、そしてご助力くださったアルムナイの方々、いつもそばで私たちを温かく見守ってくださった主催団体の方に心から感謝している。この場を借りて御礼申し上げます。

最後に、時には衝突しつつもお互いの苦手分野を補完しながら一緒に走り続けてきたパートナーの高井君、5月以降米国から帰国し夏休みを返上して、的確かつすばやい仕事ぶりでコーディネートを助けてくれた三宅君、常に冷静沈着「助けることはない？」とってバインダーなど細かい仕事を正確にこなしてくれたBrian、世界銀行企画に熱い思いを持ち一緒に進めてくれた安田君、そして1年間を通して常にどっしりと構え仕事と共に精神的にも支えてくれた委員長長の川口君に深く感謝したい。



波乱万丈
東京サイト・コーディネーターの4人「一年間おつかれ様でした」

秋田サイト

8月3日～8月8日

サイトコーディネーター

川口耕一朗 菅家万里江 Justin Long Kendall Jackson

デリゲートスタッフ

金大鐘 竹内菜緒

秋田サイトのスケジュール

- 8月3日(金) 秋田到着
能代市にて歓迎レセプション
能代市、八峰町、藤里町にてホームステイ
- 8月4日(土) 白神山地散策
温泉入浴
ホームステイ
- 8月5日(日) 国際教養大学に移動
分科会活動
リフレクション
- 8月6日(月) 分科会活動
秋田市内散策
竿燈祭り
- 8月7日(火) 分科会活動
Amedele Led Project
Field Day
秋田フォーラム準備
- 8月8日(水) 秋田フォーラム
秋田日米協会主催レセプション
- 8月9日(木) 広島へ移動

秋田サイト理念

山に囲まれ日本海に開けた「美の国」秋田。初の北東北開催となる秋田サイトの狙いは以下の二点にある。

第一に、秋田は世界最大級のブナ原生林である白神山地や、日本一の水深を誇る田沢湖をはじめ、豊かな自然に恵まれ、なまはげや竿燈祭りなど、独自の伝統文化の宝庫である。それだけでなく、日本有数の米どころであり、野菜やりんご、牛肉など、全国の食料供給基地として重要な役割を果たしている。秋田ではホームステイや農業体験などを通し、東京、京都、広島などの都市では味わえない、日本

の「地方」を参加者に体感してもらった。

第二に、第59回の理念の一つである社会発信の場を秋田で設けた。最終日に開催した秋田フォーラムでは、秋田サイトの総括として、「太平洋から世界へ～伝統への回帰と私達の挑戦～」をテーマに、明石康氏による基調講演、日米学生会議OB・OGによる会議に関する講演、第59回会議秋田開催の総括、日米関係の軌跡と今後の展望についての有識者と会議参加者によるパネルディスカッションをそれぞれ行った。日米学生会議の73年の歴史、第59回会議の成果を県民の方々に広く伝え、地元の中予、高校生、大学生との交流の場を設けることができた。



『秋田魁新報』7月19日「国際理解を深めよう」



『秋田魁新報』2月4日「本県開催へ準備進む」



『秋田魁新報』2月7日「本県で日米学生会議」

8月3日 能代市にて歓迎レセプション、ホームステイ

秋田空港から秋田サイト期間中の宿泊先、分科会会場である国際教養大学にて秋田サイトオリエンテーションを行った後、ホームステイ先の一つである能代市へ移動した。能代市では歓迎レセプションにて齊藤能代市長から激励のお言葉をいただいた。その後、能代市、八峰町、藤里町の3つの自治体に分れ、これから2泊3日お世話になるホストファミリーとの対面を終えた参加者は、各自のホスト宅へと向かった。



『秋田魁新報』2月10日「対話 会話」



ホストファミリーの温かいおもてなし

ホストファミリーを通しての地元の人々との交流





『秋田魁新報』8月4日「秋田の伝統を体感」

8月4日 白神山地散策、温泉入浴、ホームステイ

八峰町班、能代市・藤里町班と二手に分かれ、それぞれ白神山地東部、西部から散策を行った。当初は頂上近くまで散策の予定だったが、台風直撃の影響で中止となり、八峰町班は青森県境にある十二湖の散策後、公民館に移り、白神山地に関するドキュメンタリー観賞、和太鼓体験を行った。能代市・藤里町班は白神遺産センターで白神山地に関する資料を閲覧し、藤里町の歴史を学んだ後、バスにて白神山地の全体像を鑑賞した。その後ツアーガイドの方の説明の下、岳岱の教育林を散策し白神山地のぶな林の生態などを学んだ。その他にも、郷土資料館に行ったり、市民ホールでカブトムシやクワガタに触れたりし、秋田の自然と伝統と歴史を大いに堪能する機会となった。散策後、各班とも地元の温泉に入浴し、一日に疲れを癒した後、参加者はそれぞれのホームステイ先に戻り、ホストファミリーの手厚いもてなしを受けた。世界遺産白神山地の大自然に直に触れることは、東京から移動したばかり参加者にとっては貴重な経験だった。

【参加者日記】

「お母さん。台風の中、白神山地に行くのだから、雨具を準備しておいて。」そんな話をホームステイ先の主人から聞きつつ、塩辛い焼き鮭の朝食を食べていた。外を眺めると、雨と風の協奏曲。まるでこんな嵐の中を本当にハイキングするのかもしれない、不安と好奇心とが入り混じる心情を、台風が奏でていたようだった。

朝の集合場所で変更されたスケジュールを聞いて、デリの中には安堵感が広がるが、一方で私の中

には少々残念な感じもあった。実際に白神山地に入ってみると、どこもかしこも木ばかりで、ただのハイキングであれば歩いて軽く汗を流して、それで満足



台風の中での白神山地散策

感が得られるだろう。

しかし、ふと耳を澄ます。キツツキの軽快な営みの音、風に揺られる木々の漣（さざなみ）。それらが森の静寂を破る。太古の森と

呼ばれる白神山地の生き方を垣間見た。午後からは、白神山地を紹介するビデオを見た後、市の人々の協力で太鼓を演奏する機会があった。太鼓は簡単そうに見えたが、実際にやって見るとリズムや打ち方の強弱など、音楽的センスが皆無に等しい私には、やはり無謀であった。

帰りに温泉に寄った後、ホームステイ先のご家庭で夕食を頂いた。てんぷら、刺身、きりたんぼと共に、途中から秋田特産の日本酒を勧められた。温かい田舎料理に舌鼓を打った。夕食の席で、秋田が抱える様々な問題を聞くことができた。過疎化・少子化・農家の後継ぎなど、秋田だけでなく全国の地方が直面している課題に触れた。現在、私も大分県に住んでいるため、他人事の問題ではない。日本のことがまだまだ勉強不足であると、実感した。

(間橋大地)



『秋田魁新報』8月5日「地域との交流深める」

8月5日 国際教養大学に移動、分科会、リフレクション

朝、ホストファミリーと最後のひとときを過ごした参加者は、各自治体の公民館に集合し、2泊3日のホームステイを終えた。写真を撮る者、抱き合い涙を流す者、ホストファミリーと参加者はそれぞれ互いの別れを惜しんだ。その後、残りの秋田サイト期間中の滞在先である国際教養大学に戻り、分科会を行った。夜には初のジャパデリ、アメデリによるジョイントリフレクションが開催され、東京サイトの総括を行うとともに、ホームステイ中の思い出などを語る参加者が目立った。

【参加者日記】

2泊3日お世話になったホストファミリーに朝、別れを告げる。温かいおもてなしをして下さった御家族と離れるのは辛く、涙が溢れて止まらない。必ずまたお会いしましょう、とAIUに戻るバスに乗り込んだ後も姿が見えなくなるまで手を振り続ける。

AIUに到着後、2日ぶりに他の町にステイしていたJASCerと再会。なんだか凄く長い時間会っていなかった様な気がする。いつの間にか皆と一緒にいるのが当たり前で、私にとって皆はなくてはならない存在になっていたのだと気付く。昼からは久しぶりのRTwork。大自然の中でたっぷり休養したせいか活発な議論が行われる。

夜はリフレクション。皆といるとホッとする。嬉しい事も辛い事も私達は共有している。どんなに厳しい問題でも自分で考えて皆とだったら解決策を見出せる気がする。本会議が始まって10日しかたっていないのにJASCが私の中に根付いている事を確信する。JASCで学んだ事や経験を、出会った人、そして社会に還元していきたい、そんな風に思った一日だった。(間嶋絵梨)



八峰町にて、ホストファミリーの皆様と最後の一枚

ホストファミリーノート (五十音順、敬称略)

・色んな人と話がしてみたいという動機で、役場からホームステイの依頼を引き受けました。食事に関しても何でも食べてくれ、心配していたほどコミュニケーションに関して困らず、楽しく過ごせました。滞在期間が短かったのは残念でした。(安部得直)

・藤里町国際交流協会会長として、ホームステイはいつでも受け入れるつもりでした。事前に連絡が行き届いていたので、食事などに関する問題もなく、学生の態度も良好でした。(加茂谷芳文)

・皆、とても食事を良く食べてくれ、常に礼儀正しく好感が持てました。日米学生同士が一緒になってコミュニケーションをとって、私達家族にお互いの国の文化を伝え合うことができ、とても有意義に過ごせました。(木藤直)

・秋田国体での民宿を予定しておりましたところ、地域の国体民宿担当者から引き受けの打診があり、日米学生会議を知りました。提供してくれた食事すべてを喜んで食べてくれ、大方ナス、トマト、レタス、じゃがいも、スイカ、オクラといった自宅の畑で採れた食材を使いました。日米のお二人とも礼儀正しく、今の若い方には珍しいほど心配りがあり、感心しました。おかげさまで、私達家族も異文化に触れることができ、素晴らしい体験をさせていただきました。特に小学生と幼稚園の孫二人は喜んでおりました。今後とも、本事業が長く継続されますことを祈念いたします。(工藤金美)

・日米の学生は立派でした。自分の考えをしっかりと持って、この研修、会議に臨む姿に我が家の高校生の二男は驚いており、いい刺激になりました。どちらの学生にとっても、日本の田舎を知ることとはとても良いと思います。(工藤金悦)

・初めての経験でしたが、楽しい二日間でした。またお出でになるのをお待ちしております。学生達には非常に好感を持ちました。(鈴木三男)

・学生は孫娘のように可愛く、彼らから与えられたものは大きかったです。滞在中の態度も素晴らしかったです。(豊沢幸夫)

・ホームステイに興味があり、どんな方が泊まってくれるか楽しみでした。八峰町を知ってもらい、娘、甥がホームステイの経験があり、恩返しをしたかったという動機がありました。学生は挨拶や言葉使いもよく、礼儀正しい好青年達でした。日本の風習や食事の面でも、チャレンジしようというところが好感をもてました。はじめは不安もありましたが、すぐ打ち解けて、楽しい時間を持つことができました。またこの様な機会があったら是非参加してみたいと思います。台風は非常に残念でした。(日沼宏平)

・英語を聞き話す機会を作り、将来を担う若者の支援をしようとホームステイを受け入れましたが、ホームステイによる交流も異文化理解と国際平和への貢献ができると気付きました。学生は自主的で友好的で、平和確立への意思が明確で将来への希望も抱かせていただきました。(増山裕弘)

・学生たちは環境に順応し、私達ホスト側にも気を使ってくださるなど、とても好感を持てる人達でした。出会えたことを嬉しく思います。ホームステイの期日が短すぎて、少し残念でした。(油井日出男)

8月6日 分科会、竿燈祭り

午前と午後に渡って分科会を行った後、秋田市街に移動した。この日は北東北三大祭りの一つである竿燈祭りの最終日ということもあり、100万人を超える観衆で町は混雑していた。躍動感溢れる竿燈祭りの演技を堪能した後に、参加者は帰路についた。



浴衣姿のジャパデリ・ガールズ



竿燈祭り観賞

8月7日 分科会、秋田フォーラム準備

分科会を午前、午後と行った後、Amedele Led Projectにてアメデリによるダンスパフォーマンス、Field Dayがそれぞれ催された。夜は翌日の秋田フォーラムに向け、スタッフは会場がある秋田市街に移動し準備を進める中で、他の参加者は自由時間の中で、大自然に囲まれたキャンパスでそれぞれリラックスした夜の交流を楽しんだ。

8月8日 秋田フォーラム、秋田日米協会主催レセプション

秋田サイト最終日である8月8日に、「太平洋から世界へ～伝統への回帰と私達の挑戦～」と題したフォーラムを開催した。当フォーラムは2月から半年間かけて、秋田日米協会との共催で取り組んできたプロジェクトである。秋田ビューホテルの大ホールを借りて行われた当フォーラムは、当日多くのメディアの取材が入り、総勢300名程度の来場者数を記録する、非常に大規模なフォーラムとなった。以下が本フォーラムの概要である。

【開催目的】 第59回日米学生会議秋田開催の総括フォーラムとして、「太平洋から世界へ～伝統への回帰と私達の挑戦～」をテーマに、明石康氏による基調講演、日米学生会議OBである茂木健一郎氏による会議に関する講演、第59回会議秋田開催の総括、日米関係の軌跡と今後の展望についての有識者と会

第3章 本会議・サイト活動

議参加者によるパネルディスカッションをそれぞれ行う。日米学生会議の73年の歴史、第59回会議の成果を県民の方々に広く伝え、特に地元の中学、高校生に国際交流、国際関係に興味を持ってもらい、秋田県から次代を担う人材の育成に寄与する。

【日時】 2007年 8月8日(水)

【会場】 秋田ビューホテル 飛翔の間

【テーマ】「太平洋から世界へ～伝統への回帰と私達の挑戦～」

【言語】 日本語及び英語(日英同時通訳付)

【概要】

① 主催者挨拶・来賓挨拶(13:30～14:00)

<主催者挨拶>

第59回日米学生会議実行委員長 川口耕一郎
秋田日米協会会長 須田精一

<来賓挨拶>

秋田県副知事 西村哲男
秋田市市長 佐竹敬久

※その他前参議院議員金田勝年様、岩手県庁増澤享様から祝電を頂いた。

② 第一部(14:00～14:30)

明石康氏基調講演「今日における日米のパートナーシップの重要性」

元国連事務次長である明石康氏に、太平洋の平和を目的とした二国間関係から、世界の平和を目的とした二国間関係へと変貌し、これからの可能性に向けて模索を続ける現在の日米関係について、ご自身の国連での経験を交えながらご講演頂いた。興味深い内容に、フォーラム参加者は熱心にノートを取っていた。

③ 第二部(14:35～15:25)

茂木健一郎氏記念講演「私と日米学生会議」

日米学生会議OBである茂木健一郎 ソニーコンピュータサイエンス研究所上級研究員兼東京工業大学大学院連携教授より、茂木氏が参加された日米学生会議の思い出について語って頂いた。茂木氏はNHK放映のテレビ番組「プロフェッショナル」でパーソナリティーを勤められる傍ら、脳科学者として様々な分野でご活躍されているが、そのような過密なスケジュールの中、「日米学生会議のためなら」

ということで無理を押しにご出演くださった。時に冗談を交えながら、日米学生会議の経験、及びそれから受けた影響、会議の意義についてご講演くださり、会場を沸かせた。



地元テレビでもフォーラムの様子が放映された



「映し合う」(茂木健一郎 クオリア日記から抜粋)

日米学生会議(Japan-America Student Conference)というのは、1934年に始まり、戦争による中断を挟んで今日まで続いている学生主体の会議。今年で59回目。毎年、交互にアメリカないしは日本で開催され、日米の学生が約1ヶ月間、各所を回りながら経験し、討論を重ね、相互理解を深め合っていく。宮澤喜一さんや、ヘンリー・キッシンジャーもかつて参加した。私は第38回に参加した。アメリカに行く回で、シカゴやミシガン、ボストン、ニューヨークを回った。本当に強度の高い経験で、さざざまな忘れられない思い出がある。

最初の夜に、アメリカ側の参加者たちが、「I am a typical American」という劇をやったそれぞれの祖先がどこからやってきたかを喋ってから、最後にI am a typical American(私は典型的なアメリカ人です)と付け加えるのである。私の祖母はイタリアから、祖父はイギリスから来ました。ニューヨークで会って恋に落ちました。私は典型的なアメリカ人です。私の両親はロシアから移民してきて、カリフォルニアに住んでいます。私は典型的なアメリカ人です。私の祖先はアフリカから来ました。私は典型

的なアメリカ人です。様々なバックグラウンドの人たちがいて、それぞれが「典型的なアメリカ人」である。素晴らしい演し物だった。アメリカ側の学生たちは、各地に散らばっていて、出会ってから一日くらいしか経っていない。それで即興で劇を作り上げる。瞬発力に感銘を受けた。ミシガンでファーム・ステイした時は、毎日食事はポークとポテトとコーンだった。夏の盛りで、フェアが来て、メリーゴーラウンドとかそういうものがどこまでも広がる麦畑の中にぱっと現れ、夢のように消えた。とても宗教的な人々。海辺に二組の足跡がある。「もう一人は誰ですか」と聞くと、神が、「私がお前と一緒に歩いたんだよ」と答える。「なぜここは一組しかないのですか」と聞くと、神が、「私がお前を運んで歩いたんだよ」と答える。そんなカレンダーをくれた。心の優しいひとたち。シカゴで突然大雨に降られて、アレックスたちとびしょ濡れになって大笑いしたこと。ニューヨークのアムネスティ・インターナショナル本部を訪問して、「手紙を書くこと」が良心の囚人の待遇を劇的に変えることができることを学んだこと。素敵な思い出がある。私は22歳だった。

第59回の会議は日本各所を回りながら開催中だが、その実行委員長の川口耕一朗くんから、秋田フォーラムに来てくれないかとお誘いを受けた。日米学生会議からの依頼ならば、ぜひとも受けなければならない。秋田駅前の秋田ビューホテル。会場にいる日米の参加者に声をかけて、談笑した。どれだけ準備が大変か、経験者としてよく知っている。自分たちで全部やる。企業を回って、寄付をお願いすることとか、各所のイベントの準備、関係者との折衝とか。だから、ボクは、参加者たちに、偉い、がんばれ、楽しめよ、身体には気をつけるよ、と言いたい。川口くんからは、秋田の高校生など地元の人も多し、同時通訳も入っているから日本語でと言われていたが、ボクもどうせだったら英語漫談をやりたかった。それで、日米学生会議の思い出と、日米関係についての思いを40分くらい喋った。いやあ諸君、楽しかったであるぞ。秋田で日本とアメリカの学生が出会い、高校生がたくさんきて、出会っ

て、共鳴して。こういうことは掛け替えがない。他者とは出会うべきだ。映し合うべきだ。

④ 第三部 (15:30～15:45)

会議参加者による第59回日米学生会議秋田開催総括
第59回日米学生会議参加者であり、メディア分科会所属の金大鐘と竹内菜緒が、秋田日米協会及び有限会社アルファビジョン千葉康彦氏、並びに株式会社ニューフォト北日本のご協力の下、日米学生会議秋田開催の様態をまとめたビデオを制作し、会場で放映した。参加者の楽しそうな表情と、作品の完成度の高さに会場から大きな拍手が起こった。その後、金大鐘とアメリカ側実行委員で秋田サイトコーディネーターのKendall Jacksonに秋田サイトの感想をそれぞれ語ってもらった。

⑤ 第四部 (15:45～16:30)

日米学生会議参加者と高校生との交流会
地元高校生及び大学生100人弱と日米学生会議参加者72人が、16のグループに分かれて、別室にて交流会を行った。交流会には、秋田県教育委員会教育長の根岸均様もご参席下さり、会のはじめにご挨拶を頂いた。当プログラムでは、教育分科会のメンバー8名を中心とする日米学生会議参加者16人のグループリーダーのリードのもと、地元学生と日米学生会議参加者が英語によるアイスブレイキングや歓談を楽しんだ。非常に和気藹々とした雰囲気、参加者からも「とても楽しかった」という声が聞くことが出来た。この交流会を通じて、秋田県の学生が国際交流の楽しさや面白さを少しでも味わってもらえたならば本望である。



地元学生との交流会

⑥ 第五部 (16:30～17:30)

パネルディスカッション 「グローバルパートナー

第3章 本会議・サイト活動

「パートナーシップの探究と次代の創造」

有識者と日米学生会議実行委員が第59回日米学生会議のテーマである「グローバルパートナーシップの探究と次代の創造」というタイトルの下、パネルディスカッションを行った。パネルディスカッションでは、これからの日米のパートナーシップの可能性や、国際教育等など多岐にわたる分野を討議した。



有識者と実行委員によるパネルディスカッション

【パネリスト】

- ・明石 康 元国連事務次長
- ・中嶋嶺雄 国際教養大学理事長・学長
- ・大井 孝 財団法人国際教育振興会理事長・東京学芸大学名誉教授
- ・菅家万里江 第59回日米学生会議日本側副実行委員長・秋田開催責任者
- ・Morgan Swartz 第59回日米学生会議米国側実行委員長
- ・Jonathan M. Hall (ファシリテーター)
Assistant Professor, Department of Comparative Literature / Film & Media Studies
日米学生会議OB

【スタッフ】

秋田日米協会 鈴木力雄、松橋恭太郎、関口弘子
ガッツエンターテイメント 石垣政和 (MC)
ABS秋田放送アナウンサー 松井絵里子 (MC)
ユーランドホテル八橋 松村謙裕

【通訳】

野口由紀子
佐藤直人
藤田恵里子

【共催】

- ・財団法人 国際教育振興会、秋田日米協会

【企画・運営】

- ・第59回日米学生会議実行委員会

【特別後援】

- ・外務省、文部科学省、米国大使館、秋田県、秋田市、国際教養大学、財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会、社団法人 秋田日米協会、日米文化センター

【後援】

- ・秋田放送、秋田テレビ、秋田朝日放送、NHK秋田放送局、秋田魁新報社、河北新報社 秋田総局、朝日新聞社 秋田総局、毎日新聞社 秋田支局、読売新聞社 秋田支局、産経新聞社 秋田支局、日経新聞社 秋田支局

【賛助】

- ・株式会社サンブリッジ、いちごアセットマネジメント株式会社、21委員会、多逢会、国際教養大学教育振興会

【広告協賛】

- ・秋田日産自動車株式会社、株式会社秋田ニューバイオファーム、株式会社伊徳、大森建設株式会社、開発株式会社、株式会社サノ・ファーマシー、戸田鉄工株式会社、中田建設株式会社、株式会社飛良泉本舗、本庄電気工業株式会社、株式会社ヤマダフーズ、秋田陸運送株式会社、株式会社秋田ジェーシービーカード、株式会社北日本オフィスエンジニアリング、株式会社工藤興業、コマツ秋田株式会社、株式会社東北ビルカンリ・システムズ、岩田光学工業株式会社、サントリー株式会社、株式会社間組 秋田営業所、株式会社アイセス、秋田共立株式会社、株式会社秋田銀行、アキタセキエレクトロニクス株式会社、秋田ビューホテル株式会社、秋田ヤナセ株式会社、羽後電設工業株式会社、雄勝セラミックス株式会社、有限会社加賀谷新聞店、住友生命保険相互会社 秋田支店、医療法人せいとく会、瀬下建設工業株式会社、タブロス株式会社、辻兵商事株式会社、東京海上日動火災保険株式会社 秋田支店、由利工業グループ、株式会社ニューフォト北日本、北日本興業株式会

社、株式会社共立エーティーエス、株式会社栄田電器、有限会社佐藤製作所、株式会社三栄機械、高尾工業株式会社、株式会社山二、株式会社秋田新電元、株式会社相場商店、株式会社大久保製作所、小松ばね工業株式会社、JUKI電子工業株式会社、東北電力株式会社、秋田アーバンビルド株式会社、羽後設備株式会社、天寿酒造株式会社、向井建設株式会社 東北支店秋田営業所、両関酒造株式会社

【メッセージ】

＜麻生外務大臣＞

第59回日米学生会議秋田フォーラムの開催に当たり、日本国外務大臣として、日米両国の学生の皆さんを心より歓迎いたします。

ワシントンにあるJapan-America Student Conference (JASC：日米学生会議)の事務局には、戦前に撮影された1枚の白黒写真が、今なお大切に保存されていると伺っています。1人の学生を写した、今は色褪せた写真です。その時代故、栄養状態が良くなかったのでしょうか、痩せすぎたその青年は、白いシャツと、折り目の取れたズボンという質素そのものの格好をしています。表情には、わずかに含羞を湛えた笑みが読み取れるということで、おそらくは後年、私自身、お近く接した、あの馴染み深い風貌を彷彿させるものでありましょう。青年とは、宮澤喜一元総理でありました。宮沢元総理は、1939年の第6回と、1940年の第7回、すなわち戦前では最後に当たる2回の日米学生会議に参加した、草分けの一人です。もしご健勝であれば、どれほどか現役学生諸君の輪に加わり、共に語り合いたかったでありましょう。惜しむらくは過ぎる6月28日、世を去られました。戦後の日米関係に大きな足跡を残された政治家が、もはやこの世におられないことを、改めて悼むものであります。

日本と米国に、歴史は時として過酷な試練を課しました。しかし潜り抜けてみると、絆は必ず強くなりました。今や志と価値観を共にする両国は、21世紀の世界に安定と平和をもたらす確固たる礎をなしています。けだし宮澤元総理を始め、日米学生会議に集った若者こそが、両国関係に今日の姿をもたら

すうえで大いなる貢献をなした人々であったことを、私は信じて疑いません。

日米学生会議は、太平洋をまたぐ学生交流として最も長い歴史をもつ、他に類例のない集まりです。先人たちの築いた伝統を継ぐ者として、今日の参加者学生諸君にはぜひ、誇りを高くもっていただきたい。日米が相共に、いかなる善をなし得るかを考えていただきたい。そしてなによりも、長く続く友情を豊かに育ててほしいと願うものです。

＜伊吹文部科学大臣＞

第59回日米学生会議秋田フォーラムの開催にあたり、ご挨拶申し上げます。

日米学生会議が、本年ここに記念すべき初の秋田開催を迎えられましたことに対し、本日参加の皆様、更にこの会議を支援された関係者の皆様に心よりお祝い申し上げます。

日米学生会議が1934年以来、世紀を越えて今日まで引き続いていることを喜ばしく思います。日米両国は戦後半世紀にわたり共通の価値観の下、世界でも他に類を見ないほどの強固なパートナーシップを築き、世界平和の維持と発展に貢献して参りました。そのような歴史の中で、過去の会議参加者が日米両国において大いに活躍されていることを見るにつけ、次世代を担う若者の交流の重要性を強く認識させられる次第であります。

学生の皆さんが、まさに使命感を持って日米関係のあり方を考えていくことは、皆さんの将来にとっても、また日米両国の将来にとっても非常に有益なことであると考えます。皆さんが自由闊達な意見交換を通じ、今後の日米関係、更には国際社会の発展に貢献して下さることを大いに期待します。



秋田日米協会主催
レセプションにて、
なまはげと



『朝日新聞』 8月9日
「秋田訪問の米学生」

日米学生会議フォーラム
明石氏 国際貢献訴え



『秋田魁新報』 8月9日
「日米学生会議フォーラム」

秋田県
県内高校生と交流

【秋田県】日米学生会議フォーラムが、秋田県内各地の高校生と交流する機会を設けた。...

日米の相互理解深める 秋田で学生フォーラム

日米の学生が相互理解を深める「第59回日米学生会議秋田フォーラム」が8月9日、秋田県内で開かれ、日本大学生、米国人学生、米国人学生が参加した。...

学友メンバーは秋田の高校生も交えて、秋田文化について話し合い、相互理解を深めた。

『読売新聞』 8月9日「日米の相互理解深める」

サイトコーディネーター後記

川口耕一郎

JASCと秋田。JASCを知れば知るほど、なぜ秋田をサイトの一つとして選んだかを疑問に持つだろう。東京、京都、広島、沖縄とここ数十年間、サイトは固定されていた。59回でも、当初はその4サイトに行くことを考えていた。

「日本の風情、伝統を日米の学生に体感してもらいたい。」この一年間、秋田を選んだ理由を幾度となく問われる度に使ったこの言葉。最初は後付けの理由に過ぎなかった。心から発した言葉ではなかったように思う。秋田に対する期待感より、責任感、いや重圧に近いものから最初の半年近くは準備を進めていた。

思えば、去年の9月。会議の事務局長である伊部氏より、秋田開催決定の旨を伝えられた。学生の方では東京、京都、広島、そして沖縄ではなく鹿児島で会議開催を開きたいという合意が出来ていた後だったので、正に寝耳に水であった。最初は、私も含めて連日事務所を訪れ伊部氏を説得したが、彼の意見は変わることはなかった。JASC初の北東北で開催する意義、世界遺産白神山地に行く意義、そして受入れを承諾して下さった国際教養大学の広大、かつ充実したキャンパスに滞在する意義。伊部氏の熱弁を聞く度に、私の心が揺れ動いていった。山形出身で、秋田にも数回行ったことがあったので、故郷の東北でJASCを開催したいという思いが日に日に高まり、他の実行委員を説得する決心が付いた。

しかし、秋田開催が決定するまで、さらに一ヶ月近い時を要した。鹿児島に決まっていたこともある。だが、それ以上に秋田で何をするのか。地味なサイトで応募者が集まらないのではないかとという実行委員からの問い。彼らにとっては何気ない一言だったと思うが、その時はなぜか生まれ故郷の東北を馬鹿にされたように聞こえた。恐らく実行委員は全員、渋々納得したのであろう。いや、正直私も彼らを説得しながら迷いがあった。秋田にコネもなく、地理に詳しいわけではない。JASCに適正かは分らない。確かに沖縄などに比べ、観光色は希薄になる。担当

サイトを決めた日に、一緒に秋田サイトコーディネーターになった菅家さんの厳しい表情が、その後の険しい道のりを象徴するかのようであった。

やはり、実際に準備を始めると進展がなかった。ホームステイをやりたいはいいが、コネもない。依頼の仕方も分らない。秋田県庁にでもお願いをなさいと伊部氏より指示を受けるが、担当者が誰なのかも分らない。1月まで秋田に関係する様々な方にお会いしたが、具体的には何も進まなかった。

そんな窮地を救って下さったのが、国際教養大学の担当者である辻田さんだった。秋田サイトの一週間の予定表に助言を下さり、各企画の実現のためにその方面の担当者を紹介して下さった。そして、2月に初めて秋田に出張に行った時、やがてお世話になることとなる秋田県庁、山本地域振興局、秋田市役所、秋田魁新報社、そして国際教養大学中嶋学長と明石康氏との面会を私達二人のために設けて下さり、一日中付き添って下さった。今思えば、あの日の面会がなければ、ホームステイも、竿燈祭りも、そして秋田フォーラムも全て実現していなかった。

2月の出張の際、もう一つ大きな出会いがあった。連れられたのは、秋田一のホテルである秋田ビューホテル最上階のVIPルーム。夜行バスの旅の後、秋田でただただ頭を下げ続けてきた私にとって、シャンデリアの光の眩さには圧倒された。面会の相手は秋田日米協会会長、由利工業グループ代表の須田精一氏。そして開口一番に、

“Are you an optimist or a pessimist?”

会長の堂々たる風貌に威圧感すら覚えていた私にとって、想定外の質問に答えるだけの余裕はなかった。その後30分間近く、JASCの話はあまりしなかったように思う。若者たるもの、optimistでなければ成功しないと。JASCの委員長もそうではないのかという問いに、作りかけの笑顔で返すしかなかった。それまでの秋田サイトに対する守り、逃げの姿勢を見透かされていたのであろう。部屋を退出される時に、「必要な協力は何でもします」と言われた時には、安堵感と同時に、自分の弱さに気付かされ

た。

この2月の出張が大きな転機だった。辻田さんのご紹介で、白神山地周辺の自治体である能代市、藤里町、八峰町でホームステイを行う話も進展するようになった。そして、須田会長の命でJASC担当となった由利工業の松橋さんとは、会議最終日にレセプションを計画する話が進んでいた。

2回目の出張を控えていた、2月下旬。参加者の選考を契機に、会議の理念に関して実行委員で意見が割れた。感想文に詳細は言及してあるが、「社会発信」をどこまで具体化させるかで委員が二分された。一方では、一般公開のフォーラムの重要性を主張するもの。他方では、フォーラム開催の困難を現実的な視点から説明するもの。前者に属していた私は、それを契機に自分のサイトである秋田でフォーラムを開きたいと考えた。経済問題でもない、政治問題でもない。JASC、いやそこで輝きを放つ参加者72名を社会に発信するフォーラムを開催したい。秋田サイト最終日に開催した「秋田フォーラム」の原点はこの時であった。覚えたての企画書作りを早速実践に移し、有識者による日米関係の講演、OBによるJASCの歴史についての講演、59回デリゲートによる秋田サイトの総括、秋田サイトのビデオ上映、そして有識者と学生によるパネルディスカッションを含んだ「秋田フォーラム企画書」が完成した。自分で読んでも非現実的な企画書。でも、実現させたかった。本気で「史上最高」の回に相応しい、社会発信を59回で達成したかったから。

しかし、フォーラムをやると言っても、集客のための広報の術もコネもない。講師も決まっていない。何よりも、何十万、いや何百万というフォーラム開催の費用をどのようにして捻出するか。2回目の出張の際、朝迎えに来て下さった松橋さんに恐る恐る聞いてみた。秋田日米協会の方で、フォーラムの協力してくれないかという問いに、松橋さんは驚いた表情もせずに、「会長もそのつもりです」と。出張の全日程を終え東京に帰る直前に、松橋さんから須田会長の伝言を聞かされた。

第3章 本会議・サイト活動

「金の心配はするな。」

それは、秋田サイトに対して守り、逃げの姿勢でいた自分を変えてくれた一言。“pessimist”ではなく“optimist”に変わった瞬間だった。この秋田の地で、JASCの歴史の中で「史上最高」規模のフォーラムを実現させたい。以後、毎月夜行バスによる秋田出張を重ねた。私に代わり、3月から「秋田サイト総責任者」になった菅家さんの働きで、懸案事項であったホームステイ先も見つかり、国際教養大学での滞在も詳細まで詰めることができた。そして、秋田フォーラムに関しては出張以外でも、日々彼女と松橋さんとが連絡を取り合っていた。財務、広報活動は秋田日米協会が担当し、フォーラムの中身は私達の方で企画を進めた。松橋さんだけでなく、秋田日米協会の鈴木事務局長、関口さんにもご協力いただき、準備は進められた。

フォーラム当日。300人近い来場者に加え、テレビ、新聞といった報道関係者も多くみられた。最後のパネルディスカッションでアメリカ側委員長のモーガンと菅家さんの二人がJASCの意義について、明石氏、中嶋氏、大井氏といった有識者の方々と対等に議論を交わしていた時、スタッフとして会場後方に待機していた私は必死に涙をこらえていた。議論に耳を傾け、頷く来場者の一挙一動を見守りながら、JASC史上最高規模の「秋田フォーラム」を完成した喜びに浸っていた。

秋田では、ホームステイ、竿燈祭りなどで日本の風情、伝統を体感でき、かつ分科会や自由時間を通して、参加者間の「絆」を築くことができた。そして、秋田フォーラムで会議のもう一つの軸である、「社会発信」を達成することができた。実行委員長としては悔いが残ることもある。しかし、秋田サイトコーディネーターとしては十二分に力を出し尽くすことができた。それも、須田会長の一言で、“optimist”に生まれ変わることができ、地元根付いた会議を行うことができたからであろう。

最後になりましたが、第59回日米学生会議秋田開催に際し、多大なるご協力を賜りました関係者の皆様にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。あ

りがとうございました。



フォーラム会場で、秋田日米協会の松橋さんと

菅家万里江

このたび秋田サイトを非常に意義のある充実したサイトにすることが出来、大変嬉しく思います。そして、そのようなサイトにすることが出来ましたのも、ひとえにご協力いただいた諸団体、諸自治体の方々のおかげだと心より思っております。本当にどうもありがとうございました。

さて、日本側実行委員長の川口と二人三脚でこのサイトをコーディネートしてきたため、川口のサイトコーディネーター後記にほとんど私が言いたいことが集約されています。そのため、重なる部分は省かせていただき、川口が言及していないホームステイ及び国際教養大学滞在について述べさせていただきます。ゆえにこの文章内でお礼を言わせていただくことは出来ませんが、辻田様、秋田日米協会の方々には心より感謝申し上げていることをここに銘記させていただきます。

秋田サイトでのホームステイについては、秋田についてあまり知識が無かったこともあり、まったく手探り状態から出発した。しかし、辻田様ご紹介くださった、山本地域振興局の古井様が、いくつか候補地をご提案くださり、その中から、白神山地に近く日本の自然が満喫できる場所、ということで、能代市、藤里町、八峰町の3自治体を決定した。

ホームステイ実現への第一歩は、各自治体への御挨拶周りから始まった。古井様のご協力の下、刺すような冷たい北風と豪雪で悩まされながら、一つ一つ自治体を回り、市長、町長をはじめとする自治体のトップの方々及び、実際にコーディネートをお手伝いして下さる方と面会し、直接ホームステイをお願いさせていただいた。ホームステイの前例のない自治体では、ホストファミリーの募集などの懸案事項に難しい顔をされる場所もあったが、あらかじめ古井様の方からお話を通していただいたこともあり、ホームステイ実現に向けたご協力を快く引き受けてくださった。それからは、ホストファミリーの募集、連絡等は、すべて自治体の方が行ってくださった。会議直前まですべてのホームステイ先が決定せず、時々不安に思うこともあったが、自治体の方々の全面的なご協力のおかげで参加者72名のホームステイ先を確保することが出来、またホストファミリーへの連絡ミスもなく、非常にスムーズに企画を進めることが出来た。

またホームステイ中の白神山地散策に関しても、自治体の方の全面的なご協力を得た。特に、能代市役所の工藤次長が日曜日を返上して私たちを白神山地に連れて行ってくださり、実際のコースとスケジュールを手伝ってくださった。工藤様には心よ

り感謝申し上げたい。あいにく、当日は台風が上陸し、雨天となってしまったが、その際のスケジュールの変更に関しても、自治体の方がリードして下さったおかげで、白神山地を体験する企画をキャンセルすることなく、また違った形で秋田の自然と伝統を楽しむ機会を得ることが出来た。ご協力いただいた方々には心より御礼申し上げます。

また、国際教養大学滞在期間に関しても、非常なご協力を得ることが出来た。施設に関するオリエンテーション（LANの貸し出し、国際教養大学の施設やバス等の情報をまとめたブックレットの作成などを含む）、ベジタリアンや食物アレルギーを持つデリケートへの対応、新設の寮の使用、24時間オープン図書館の利用など、私どものために全面的に施設を開放して下さり、また多くのスタッフの方にご協力いただいた。全面的なバックアップ体制をとっていただいたおかげで、参加者がゆったりとした気持ちでお互いの絆を深め、また、分科会をより充実させることが出来た。国際教養大学の方々には、心より感謝申し上げたい。

最後になりましたが、秋田サイト開催のためにご尽力くださった方々に改めて御礼を申し上げます。本当にどうもありがとうございました。

<h1 style="margin: 0;">広島サイト</h1> <p style="margin: 0;">8月9日～8月12日</p>	サイトコーディネーター
	松田浩道 廣瀬裕子 Alissa Marque Casey Samulski
	デリゲートスタッフ
渡辺恭子	

広島サイトスケジュール

- 8月9日(木) 広島着
- 8月10日(金) 分科会活動
宮島訪問
お好み焼き体験
- 8月11日(土) 日米広島学生会議1日目
広島での学生による平和公園ガイド
松原美代子氏による被爆体験講話
平和記念資料館見学
市内散策
- 8月12日(日) 日米広島学生会議2日目
平和と核についての班別討論
シンポジウム発表準備
一般公開シンポジウム

※宿泊場所：ホテルサンルート

広島サイト理念

核問題は国際政治において非常に重要な位置を占め続けているし、日米の原爆投下に対する歴史認識の差は依然として大きい。

広島では、現地からの学生を27名募集し、地元で開かれた形で広島の学生とともに平和学習と討論を行うことを目指した。「平和の重要性を再認識し、平和を祈る」という従来の平和学習のスタイルから一歩踏み込んで、実際に平和を実現するために日米はどうすべきなのか、我々はどう行動すべきなのかという現実的な側面にも議論が発展するよう準備を重ねた。さらに、講演が中心となる従来のフォーラムとは異なり学生の発表を中心におき、学生の主体性が存分に発揮できるよう工夫を凝らした。

真剣な討論と一般公開のシンポジウムとともに、宮島では美しい景観のなかで親睦を深めるとともに、お好み焼きを実際に自分たちで作って味わう企画も行い、あらゆる側面から広島を経験し、友情を深めることを意図した。



『中国新聞』2007年8月11日「広島で日米学生会議開幕」

8月9日 広島着

関西空港からバスで長時間かけ、広島に入ったのは夜遅くであった。レストランで夕食を取った後、徒歩でホテルへと向かった。途中原爆ドームの横を通った際の受け止め方は各自それぞれだったようだ。

8月10日 分科会活動、宮島訪問、お好み焼き体験



宮島での参加者たち

お好み焼き体験

オタフクソース、お好みフーズ、JA広島、キンビール、三三三（みささ）さんの協力により、お好み焼き体験を行った。日本側で行ったオタフクさんの事前研修の成果も活かし、本格的な鉄板を使っての広島風お好み焼きを堪能した。同時に、参加者の親睦を深める非常によい機会となった。



作り方を教わる参加者

【参加者日記】

今日はフェリーに乗って宮島に行きました。基本的に終始自由行動だったので、厳島神社に行ったり、美術館を見学したり、川原で遊んだり、鹿を追い掛け回したりと、みんな思い思いの時間を過ごしていました。ちなみに私は昔ながらの商店街を歩きつつ、広島の名産である牡蠣やもみじまんじゅうを試食しました。そして、晩ご飯には「三三三」というお好み焼き屋さんで、広島風お好み焼き作りを体験しました。まず店の人が焼き方のお手本を見せてくれて、その後、一人一枚ずつ挑戦しました。見栄えはイマイチだったけど、みんなで作ったお好み焼きの味は格別でした。
(佐藤逸美)

日米広島学生会議 8月11日～12日

広島側参加者

阿部真実	広島女学院高校	1年
栗野真由子	広島女学院高校	1年
浦田真穂	広島女学院高校	1年
小田康弘	広島学院高校	2年
落合由里	広島女学院高校	1年
梶川直樹	広島市立大学	3年
串岡理紗	広島女学院高校	1年
久保田千尋	広島市立大学	2年
小林可奈	大阪外国語大学	2年
小林萌子	京都大学	1年
佐藤未希	広島市立大学	3年
清水勇佑	広島学院高校	2年
新宮清香	東京大学	2年
高井麻里子	広島市立大学	3年
高松麻実子	広島市立大学	4年
寺澤智弘	広島学院高校	2年
中村英一郎	広島大学	2年
平田仁胤	広島大学 博士課程後期	2年
平原舞子	広島女学院高校	1年
堀越未花	広島女学院高校	1年
松浦花穂	広島女学院高校	1年
丸橋綾子	広島女学院高校	1年
村上有佳	広島大学	4年
安永研人	広島学院高校	2年
矢野成美	広島大学	3年
吉本侑加	広島女学院高校	1年
渡部寛史	広島学院高校	2年

第3章 本会議・サイト活動

8月11日 日米広島学生会議 第1日

広島の子供による平和公園ガイド

広島から参加した学生さんに平和公園ガイドの練習をしていただき、当日英語で班別に分かれてガイドを行う試みを行った。普段ボランティアガイドとして活躍なさっている山根美智子さん、清水恵子さん、住廣寿子さんには6月からガイドの練習のアドバイスをしていただき、広島側参加者はグループごとに練習を重ね、当日を迎えた。



広島の子供によるガイドに聞き入る日米学生会議参加者

被爆体験講話

平和公園のガイドの後、松原美代子さんによる英語での被爆体験のお話を伺った。松原さんは旧制女学校一年生の時、爆心地から東南1.5キロメートルの鶴見町で、建物疎開の後片付け作業中に被爆され、その経験をもとに国内外で証言活動を続けてこられた。海外で英語での証言も行ってこられている。

(ウェブサイト：ヒロシマの心を伝える会

<http://www.hiroshima-spirit.jp/ja/tsutaerukai/miyoko/miyoko.html>)

【参加者日記】

“Please let me go, I have to help my son!”
“Please tell the teacher I came here…” 62年前のこの街で起きた惨劇の中で聞かれた悲痛な叫び声を再現し、会場の私たちに震感させたのは、「ヒロシマの心を伝える会」代表の松原美代子さん。8月11日、広島平和記念館にて、私たちは彼女から原爆の体験

談を伺った。

あの日爆心地から1.5キロの場所で被爆した松原さんは、世界中のあらゆる場で平和への希求を訴え続けてきたという。歴史を後世に残す行為には記録と記憶の二通りがあると言われる。歴史は国家や立場によって見方が異なり、また平和の定義も人によって様々で当然だが、特に私たちのような“戦争を知らない子供たち”が過去を記憶する上で、今回のような体験談に触れ、その語り部にとっての「真実」を一つでも多く心に留めることが必要だと感じた。会場をあとにして地上に出た瞬間、それまでとは違う広島が見えた気がして、日米両国の学生がこの地に立っていることの意義深さを改めて実感したのは私だけではないはずだ。(篠原由香里)

8月12日 日米広島学生会議 第2日

以下の10の班に分かれ、午前中にディスカッションを行い、成果を午後のシンポジウムで発表した。講師のジェイコブス先生に講評をいただいたあと、第二部では各班が作った模造紙を会場に展示し、一般来場者を含めて自由に意見交換や交流を行った。

班別のテーマとリーダー

※かっこ内はリーダーを示す

GROUP 1: Education of the Atomic Bomb: Lessons from Hiroshima and Mr. Kyuma

(Joshua Schlachet 加納康宗)

Sample Questions: What lessons should we take from Hiroshima? How should we evaluate the Japanese Defense Minister's remarks that Hiroshima "could not be helped?"

GROUP 2: Ethics of scientists in development of atomic bomb

(Joshua Turner 川口耕一朗)

Sample Questions: Should scientists concern themselves with the political effects of their research?

GROUP 3: The way toward nuclear nonprolifera-

tion and disarmament

(Casey Samulski 山本詩乃)

Sample Questions: What do you think about Japan's Peace Constitution? How can the global community encourage states like India, Israel and Iran not to develop nuclear weapons?

GROUP 4: Relevance of nuclear deterrence in today's world

(Nancy Yang 古屋佑樹)

Sample Questions: Are nations with nuclear weapons less likely to go to war with each other? How does North Korea/Iran's desires for nuclear weapons affect international security?

GROUP 5: Difference between US and Japan's views about atomic bomb

(Samantha Scully 金大鐘)

Sample Questions: How have students been taught about the atomic bomb in the US and Japan? What are the differences between US and Japanese textbooks about the atomic bomb?

GROUP 6: Justifications of and arguments against dropping the atomic bombs in Japan

(Danielle Vokal 上田 來)

Sample questions: What do Japanese and Americans think about nuclear weapons today? Do you view nuclear weapons as an offensive or defensive weapon?

GROUP 7: Japan's nuclear armament and the Security Treaty between Japan and the US

(Tsz Kiu Liu 上野良輔)

Sample questions: What is collective defense? Should Japan have the right to collective defense?

GROUP 8: Controversy surrounding Article 9

(Bryan Beaudoin 渡辺恭子)

Sample questions: What are the pros and cons of Article 9? What are the possible effects on US-Japan relations if Article 9 is revised?

GROUP 9: Differing stories around the atomic bomb and current views about nuclear weapons

(Bethany Marsh 間嶋絵里)

Sample questions: What are the differences between the American and Japanese stories about Hiroshima and Nagasaki? How do Japanese/Americans view nuclear weapons today?

GROUP 10: The right to develop nuclear weapons

(Ryan Urie 高井竜輔)

Sample questions: Should a nation have the right to dictate to other nations their nuclear weapons policy? What can Japan do today to help control international nuclear proliferation?



第二部で一般来場者と活発に意見を交わす参加者



発表のために用意したパネルの前で

【参加者日記】

戦争の面影を今も刻む街、広島。今日はその広島滞在の最終日。私たちは広島などの学生を交え日米広島学生会議と称し、地元の方々を巻き込んだ大きなシンポジウムを開催した。総勢100名を超える参加者が9つのグループに別れ、それぞれ核に関するトピックについて議論し合い、シンポジウムでプレゼンテーションを行うという形だ。

議論に費やせる時間は当日の午前中だけであり、必ずしも十分な議論ができたとはいえないだろう。ここでプレゼンテーションしたことが現在の世界の核状況に直接的な影響を与えとも思えない。しかし、私たちは確かに広島という街で、核についての知識を共有し、真剣に考え、それぞれの意見を述べたのである。このことがどれほど世界に対して影響をもてるのか。この経験が種となり、皆の心の中に息づき、世界に二度と「広島」が生まれえないための何か形成されることを願ってやまない。

(高野恭平)

広島からの視点から一

広島県出身で学生広報や企画面で活躍した参加者、また、広島からの参加高校生の感想文を掲載する。

第59回日米学生会議参加者
広島市立大学3年 渡辺恭子

長時間のバス移動の末、私たちは、夜だというのに蒸し暑さが残る広島に降り立った。私にとっての広島は、平和を考えるきっかけを与えてくれた土地であり、そして何より緑に溢れ癒しを与えてくれる場所でもある。JASCerの皆とこの地を訪れる事が出来る喜びの一方で、私は不安だった。それは、私がヒロシマを国際政治の力関係に基づく理論よりも、原爆が投下されたという事実に伴う悲しみや苦しみなど、湧き出る感情でしか捉えられていなかったからだ。すでに、秋田のRTディスカッション中に、「広島や長崎は平和のためのgood sacrificeだった」という、肯定的な意見に衝撃を受けていたこともあり、これ以上、広島を否定されるのが怖いという感情があった。実際、広島のRTディスカッションでも、「原爆投下がなければ広島は今の様に平和を訴えていなかったらろう」という発言も見られた。私のうがった見方かも知れないが、今の広島で平和を切に願っている人たちが、そして今も苦しんでいる被爆者の人たちの想いを踏みにじられた様に感じた。しかしながら、自分の中で整理できず言葉に出来ない感情や、反論できない不甲斐なさから何も言えないまま泣いてしまった。このままではいけないと思い、怖いながらもそのアメドリと納得がいくまでディスカッションをした。その後、広島や京都などでそのアメドリと話をすることで私たちはお互いが合意している平和創造の部分、相反する創造への道のりなど様々なことを少ないながらも共有できた。平和という言葉には実に多くの意味があり、同じ平和を目指しながらもその過程が異なるというだけで、対立が生まれる事もある。しかし、分かり合えないことも沢山あるけれど、大事なものは、分かるとうとする姿勢、また色々な異なる価値観がある事を認識する事だと私はJASC、そして広島を通して強く感じた。秋田で迎えた8月6日から平和の願いを



『中国新聞』2007年8月14日「広島で日米学生会議シンポ」

こめながら作った折鶴を、最終日の夜、サダコの像へみんなで捧げた。「鶴の折り方教えてくれる？」の一言から始まり、折り慣れない難しさに四苦八苦しながらも真剣なまなざしでもくもくと折っていたアメドリ。RTの休憩時間、ホテルのロビー、飛行機の中、様々な場面で協力しながら折鶴を創っている光景はまさに平和を肌で感じる瞬間だった。日米学生会議という、社会的な利害関係なしに、お互いの考えや感情を率直にぶつけ合える環境で、ヒロシマ、そして平和について考えられたのは非常に忘れがたい経験となった。

広島女学院高校1年 堀越未花

私は今回初めて日米学生会議に広島の学生として参加させてもらい、とてもたくさんの事を学び、経験させてもらいました。

以前わたしは学校で所属している有志グループの先輩方と核についてディスカッションしたことがあり、とても興味のある内容だったため今回いろいろな人のいろいろな視点からの考えを聞いてみたいと思い、「核抑止論の効能」についてのトピックに参加することを希望しました。希望通り、核抑止論のグループに入ることができたのですが、自分で調べたりグループの人と打ち合わせをしたりしていくうちに、ちゃんと自分の意見を英語で伝えられるかどうか不安になってきました。実際にいろいろな英語の資料を送っていただいた時も、その文章を理解することが出来なくて前日まで逃げ出したい気持ちでいっぱいでした。そんな中12日を迎えたのですが、前日にみなさんと半日過ごしたということもあって、変に構えることなく楽な気持ちで会議に参加することが出来たと思います。

正直、聞き取るのに精一杯で自分の考えを英語で十分に伝えるということは出来ませんでした。大学生の方々が私が日本語で言ったのを英語で訳してくださいだったので自分の意見をみなさんに伝えることが出来ました。アメリカの学生の方が指をパチパチして賛成してくださったときは嬉しくてちょっと泣きそうになりました。また同時に、「自分の意見を自分の口から伝えられたらいいんじゃないかな」と

強く感じました。

そして、いろいろな意見を聞いていると核抑止論についての考え方はみんな違ってみんな平和を想い、核が使われてしまうような世界がもう二度とこないようにと願っているということを強く感じました。

高校の先輩方とディスカッションしたときには聞けなかったような意見や考えをたくさん聞くことができ、私は今まで偏った考えしか持っていなかったのかもしれないと気づかされたと思います。今までは核抑止論に対して「核を持って核を制す」というイメージしかなかったし、それをただ否定するだけでしたが、今すぐに核をなくすのは難しいことだと思うので、まずはどの国も核を使わないようにすることから、テロリストに核を渡さないようにする方法を考えることから始めていく必要があるのだと思いました。

日米学生会議の最後に、ディスカッションした内容を皆さんの前でスピーチさせていただく機会を与えてくださり、とっても緊張したけどいい経験になりました。緊張しすぎていっぱい間違えてごめんなさい。

また、初日に行われた平和公園内のガイドでは私のカタコトな英語を皆さんが真剣に聞いてくださったので感謝の気持ちでいっぱいです。少しでも伝えられたことがあったらヒロシマの学生として嬉しいです。

11日が来るまでずっと不安に思っていたのですが、日米の大学生の方々がたくさんフォローして下さり優しく接して下さったので、2日間とても楽しく過ごすことができました。また、これからの進路に役立つお話や大学生活の貴重なお話を聞くことができ私自身、すごく収穫の多い2日間になりました。まだまだ夏休みの宿題は残っていますが、今回この学生会議に参加させてもらったことは宿題よりも多くのことを学べたと思います。とても楽しかったです。大学生になっただけJASCに応募したいと思いました。2日間、ほんとうにありがとうございました(^ω^)

広島女学院高校1年 粟野真由子

今回、日米学生会議に参加させていただいて本当にありがとうございました。たった2日間だけでしたが、多くの事を考え、また吸収することができ、とても有意義な2日間を過ごせたと思っています。これも、学生会議の皆さんが私たちに優しく接して下さったおかげだと思っています。1日目の碑巡りの際、全くと言っていいほど、碑のことについて伝えられませんでした。しかし、そんなときも、私たちの話を真剣に聞いてくださり、またフォローしてくださって、本当に嬉しかったです。

このように楽しく過ごせたことも、有意義な時間を過ごせた理由のひとつですが、なによりも核について、アメリカの方や、他県の方と話し合えたことが、私にとって本当にいい経験となりました。

いままで、私は一人ひとりの考えの持ち方を変えることによって、平和な世界をつくることができると思ってきました。また、友達と話し合っても、みんな同じような考えで、意識を確認しあう、といった感じでした。

でも、今回は違いました。核廃絶は不可能だという意見や、テロリストなどから身を守るためにも、核は必要だといった意見を聞きました。いままでに自分の耳でそういった意見を聞いた事がなく、またそのような方法で世界平和が作り出せるのか？という疑問を持ちました。でも、その意見に納得する自分がいて、とまどってしまい、考えをまとめることができませんでした。この経験は、まだ平和についての考えが未熟な私を刺激してくれました。

今でも私の考えはしっかりとしたものではないと思います。でも、やっぱり核は廃絶していくものだと思います。ヒロシマの悲しみを繰り返さない。そしてそのためには、やはり核廃絶が必要だと思います。

このような平和についてより深く考えるきっかけとなり、参加させてもらったことを本当にうれしく思っています。数年後に、今度は学生会議のメンバーとして参加したいです。今回はありがとうございました。

広島女学院高校1年 串岡理紗

まずこの会議に参加しようと思ったきっかけは、去年の8月6日をオーストラリアで過ごしたときに、8月6日への関心があまりにも薄かったことにショックを受けて、広島で起こった出来事を風化させないようにするのは、広島に住んでいる人がまず行動を起こすべきだと考えるようになったことです。特に外国人に、より理解して欲しいと思っていたところ、偶然ホームページでこの会議を知り参加を決めました。

私の班は「核抑止論」という正直普段考えたことのないことを議論しました。私自身は、「No more Hiroshima」という立場で「核と人類は共存できない」と考えていました。しかし議論をすすめていくうちに、「平和を守るために核が必要」という自分にとって新鮮な視点を知って、徐々に「核が全く無い世界」というのはもしかしたら理想であって、実際は難しいのではないかとも思いました。

ですがもちろん「核が無い世界」というのは広島の願いです。今回の会議で分かったことは、今後はその願いをどこまで届けられるか、そしてその願いから何が生まれるかということが大切だということです。私は地元の中国新聞の平和に関する新聞を作るジュニアライターとして、新聞やネットを通じてこの願いを発信していきたいです。そして、多くの人にもっと関心を持ってもらうのが目標です。最後にこのような素晴らしい機会を与えてくださった関係者の方々と、頼もしく支えてくれた大好きな班のメンバーに感謝したいと思います。ありがとうございました！

広島学院高校2年 小田康弘

広島での日米学生会議に参加して、普段は接することのできない広い世界に足を踏み入れることができたように思います。高校生のみならず大学生、それも広島だけでなく全国さらには海外に住む方々と一緒に過ごした二日間は、地元にいながらの異文化体験でした。

ディスカッションでは一人一人の考え方の多様さに驚きました。広島で暮らしていると忘れがちな視

点から見た考えも沢山聞き、自分の考えの浅さに気付かされました。発言に社会的責任が伴わない学生だからこそ可能な、自由で真摯な話し合いだったと思います。

多くの大学生と話ができた、というのも私にとっては異文化体験でした。発言、振舞い、オーラ、全てが垢抜けていて、大人と子供の境界を見たようでした。大学生活についても色々と教えて頂き、大学生の世界の広さに驚きました。

広島から参加した他校の高校生と話ができたのも有意義でした。同じ街に住んでいながらこれまで話をしたことがなかったので、各校の生徒の活動を初めて聞いて、多くの学ぶべきことを見つけることができました。これからは、情報を共有したり連携して活動したりする道がないか模索しようと思っています。

二日間の会議を終えて改めて感じるのは、この会議は文字通り学生が創る会議である、ということです。企画の全てをECの方々が一年がかりでなさり、そして参加なさる大学生が本番の会議で会に意義を加える、というのは、無から価値を創造する活動であり、とても凄いことだと思います。このような会議に短い間ながら参加させて頂くことができ、そして多くの尊敬しております大学生の先輩方や高校生の友達に出会えて、大変幸せに思っています。

アメリカ側の視点から—

アメリカ側実行委員 Alissa Marque
Reflection of an AEC

As many 59th JASCers know, the word “reflection” was one of the most commonly used words during the Conference. Whether it referred to just one person digesting the day’s activities and discussions, or the entire delegation expressing their thoughts or concerns, there seemed to be a great expectation that everyone would spend much time “reflecting.”

As an EC, it was hard to reflect about the heavy issues we discussed during JASC, such as comfort

women, Pearl Harbor, the atomic bombings in Japan, and the effects of war. I often found myself in a rapid rush keeping track of who returned their hotel room keys, where the next meal was going to be served, and who was in charge of which activity. As much as I enjoyed and relished my role in the Conference, I couldn’t help but feel numb a lot of time, perhaps because I was overwhelmed by both the joy and burden of leading a group of 56 delegates with 15 of my fellow ECs. But one night, I finally let myself step back from the daily activities of JASC and “reflect” without even meaning to do so. It had been a long day at the Hiroshima Peace Park, where local high school and college students gave JASCers a tour of the Park. Two JECs and I had spent the afternoon and early evening preparing for the next day’s Hiroshima Peace Symposium, putting together pamphlets and finalizing the details of the program.

Later that night, one JEC member and I headed back to the hotel after a series of errands including photocopying, laundry, buying bento at 7/11, and purchasing poster boards. It was a beautiful evening in Hiroshima. For once during the Conference, I found the weather bearable, and the slow walk home gave me time to mentally rest. Only then did I finally realize, and truly acknowledge, that I was in Hiroshima. My fellow ECs and I had been planning the Hiroshima site for an entire year, and until that night it had felt like a mere project with dates, times, places, and strangers. It did not feel real – even after we had reached Hiroshima, all of the planning and preparation felt like it was for something that was yet to happen. In reality, it was happening, and I suddenly realized we had arrived in Hiroshima, a city of enormous historical, and now personal, significance.

During our stroll back from doing errands to

the hotel, this JEC member and I had been talking about everything ranging from the rise of China's economy to the activities we participated in during high school and college (nerdy, I know). As we were walking along the famous river that runs through the city by the Atomic Bomb Dome and the Hiroshima Peace Park, it occurred to me how unimaginable such a scene would have been 62 years ago. A Japanese college student and an American recent graduate walking side-by-side, comparing our lifestyles, ways of thinking, and views of the world...who would have thought, amidst the destruction of the atomic bombing, the countless deaths, and unthinkable pain, that two young people like ourselves would be talking, let alone friends? The world witnessed some of the ugliest events of humanity not so long ago, and it was overwhelming to realize how far our nations and people had come in reconciling our pasts.

Throughout the Conference, many delegates asked, "I've heard JASC is supposed to be a life-changing experience - how is it supposed to be life changing?" Perhaps I am pessimistic, but I was always skeptical of the notion that JASC would truly change my life, or the life of anyone else. Sure, there are a few JASCers who discover a particular career path or a new interest in a foreign country during that special month. However, most JASCers do not experience a dramatic fireworks-like change in their lives. That night, though, I learned to be satisfied with the thought that JASC does not have to change lives to have a great impact. I am the same person I was before I attended the Conference - my career plans have not changed, nor has my general view of the world. But the moment as brief as the one I shared with this JEC member in Hiroshima will always stand out in my mind as one of my life's most memorable experiences. And for me, it's those small memories that build a life and make it

worth living. Thank you for reading.

サイトコーディネーター後記

松田浩道

初めて広島市にコンタクトを取った時のことは、今でもよく覚えている。一月、サイトコーディネーターのやり方がまだ全然つかめていない頃に、おどおどしながらまずは市長の講演依頼のために広島市に電話することにした。そこでつないでいただいた担当の方は大変親切に対応して下さり、広島サイト全般のあらゆる相談に乗っていただいた。準備のため広島を訪れた時も市長をはじめ、様々な方に紹介していただいたり、会議室探しや宿泊先の交渉を手伝って下さったりと、きめ細かくサポートして下さった。特に、広島市平和推進課の山口芳明さんの多面にわたる協力なしでは、今回のような形で日米学生会議を広島で行うことはできなかったであろう。深く感謝したい。現地で会う企業、財団、日米協会、青年会議所、新聞社、テレビ会社の方々も熱心に話を聞いて下さり、応援して下さいました。広島市立大学広島平和研究所のジェイコブス先生は、ディスカッションピックの選定から企画全般に対するアドバイスまで、丁寧に支援して下さい、内容面での充実度を確保することに貢献して下さいました。お好み焼き企画を全面的にサポートして下さいましたオタフクソース、お好みフーズさんにも感謝している。広島を訪問して準備を重ねるごとに広島の人のあたたかさを肌で感じてますます思い入れが強くなると同時に、自信を得て日米学生会議広島開催の意義について様々に思いをめぐらせた。

「どのような企画にするのが広島にとっても学生会議にとっても意義深いことになるのか―」一緒に広島を担当していた実行委員の廣瀬裕子とともに考えてたどり着いた企画案は、当初は全くイメージもしていなかったものだった。広島で新たに学生を募集して、一緒に平和学習とディスカッションの2日間の活動をし、最後に学生主体の一般公開シンポジウムで議論の成果を発表する。学生募集のため新たに広報活動をして広島で説明会を開いたり、連絡を取

り続けたりとやらなければいけない仕事の量は膨大なものになるが、それでもこのような形にしたのには日米学生会議の社会的意義をめぐる自分たちなりの考えがあった。

学生会議は社会発信をテーマに掲げているが、そもそも実のある発信内容を一ヶ月で学生が作ることは極めて難しい。とはいっても、数多くの団体から賛助を受けていながら社会に対して何も還元することなく、参加者のなかだけで話し合いをすることで十分なのか。自分たちの身の丈にあった、しかもしっかりとした意義のある「社会に対する開かれ方」を見つけ出したかった。その自分なりの答えが、今回の広島での企画である。

訪れる現地の学生に積極的に関わってもらい、日米学生会議のデリゲートとともによい刺激を与え合う。これこそ、社会からも求められ、自分たちにふさわしい社会への価値還元のあり方ではないか。第59回学生会議のテーマにある“Advocate”や「次代の創造」の具体的な方法として、より多くの学生を開催地で巻き込み、しかもシンポジウムを一般公開にして自分たちの発表を中心に据えた背景にはこのような理念があった。

当初、シンポジウムにおいて社会にインパクトを与えられるような新しいヒロシマのメッセージを学生の視点から世の中に発信することまで目指していたことは事実だ。時間的制約と学生としての限界から、そこまで目標が達成できたかといえば残念ながら達していない部分が多く残る。しかし、長期的視野に立った教育効果という意味では、十分に意義のある企画に仕上がったのではないかと思う。

広島において協力して下さった数多くの方々、そして会議に参加して一生懸命ガイドの練習とディスカッションの準備をして下さった27名の学生の皆さんに、改めて感謝したい。

廣瀬裕子

人間として一度は訪れるべきところ。そんな思いから第59回会議の開催地として広島を提案し、準備を開始した。実質三日間という日程の中で広島の食と文化を楽しみ、広島の平和に対する主張を学び、

それ以上に平和というテーマを自分に結びつけ、自ら考えるきっかけをどのように提供することができるか。そして、逆に広島を訪れる私達から広島に対して何かしら与えられるものはないだろうか。

多くの議論の末、私達はアメリカ側参加者と日本側参加者、そして広島市の学生とが協力し、「核兵器と平和」というテーマのもと、異なるサブテーマに基づく班別ディスカッションを行い、一般公開のシンポジウムで成果を発表することを目標とするプログラムを設計した。

出張やメールのやり取りを通じて、観光コンベンションビューローの下岡様や広島市平和推進部の山口様、多くの広島の方々にご支援いただき、広島滞在を企画することが出来た。

広島市の学生への募集を広島市のウェブサイトや中国新聞の記事に取り上げていただき、6月末の説明会が初めての顔合わせとなった。説明会には多くの学生が集まってくれ、それぞれの想いを話してくれた。広島を訪れ、多くの方々とお話させていただく度に感じていた「一緒にこの会議を実現させたい」という想いは一層強くなった。その後、ガイドの住廣様、清水様、山根様のお力を借り、会議参加者の渡辺恭子がガイド練習を率い、前日までそれぞれが会議に向けて努力を重ねた。

各班のリーダーとしては、日本側参加者とアメリカ側参加者とがペアを組み、会議前から当日のディスカッションの議題となるkey questionsと参考資料を作成した。8月6日には、渡辺恭子が手を挙げ、この日が広島に原爆が落とされた日であること、そしてそれぞれのメッセージを込めて千羽鶴を折り、広島へ贈ろうという提案を日米の学生へ伝えた。彼女の主張を聞いた会議参加者は、彼女や他の会議参加者から鶴の折り方の丁寧な指導を受けながら、皆で毎晩遅くまで鶴を折り続けた。このプロジェクトは、会議参加者に自分はどういうメッセージを鶴に込めたいかを考え、話し合う大切なきっかけを与えてくれた。

広島に到着した初日は広島学生として参加してくれた村上さんが迎えてくれ、広島のパンフレットの整理や71名の移動までも手伝ってくれた。そして、

第3章 本会議・サイト活動

日米広島会議初日は広島の学生が平和公園の記念碑めぐりをリードし、初日の班行動や二日目のディスカッションのファシリテーションは全て班リーダーが行った。

日米広島学生会議は、一人一人の努力によって形作られた。私達実行委員二人では、このような形で五日間の企画を実現させることは不可能であった。温かくご支援いただいた方々、27名の広島の学生さん、そして会議参加者に心から感謝したい。

学生が主体となっていくシンポジウムには、確かに限界はあるかもしれないが、自分達がイニシアティブを取り、自らが設計し、発信することが出来るということを少しでも感じてもらい、力としてもらえたらと願っている。



サダコの像に折り鶴を贈呈

京都サイト

8月13日～8月20日

サイトコーディネーター

安田雅治 杉山亮太 Andrew Ruffin Morgan Swartz

京都サイトのスケジュール

- 8月13日(月) 広島出発、神戸日米協会主催企画、京都到着
- 8月14日(火) 環境フィールドトリップ、タレントショー
- 8月15日(水) 京都観光+伝統文化体験
- 8月16日(木) 分科会セッション(フォーラム準備)
- 8月17日(金) 京都フォーラム
- 8月18日(土) 第60回実行委員会選挙、伏見日米学生交流会
- 8月19日(日) Free Day、Farewell Party
- 8月20日(月) 第59回日米学生会議解散、米国側帰国

京都サイト理念

長い歴史持つ大都市、京都は、神社仏閣などの建築物それから有形無形の伝統文化を有し、世界的に有名である。それは戦争による破壊から免れた文化の力があつたからでもあり、このため東京に次いで多くの外国人が訪れる観光都市である。さらに、ここは大学、ベンチャー企業、NGO・NPOを多く抱え、未来に向いている都市でもある。過去を大切に、頑にアイデンティティーを守る。そのことでむしろ高度に国際化したユニークな都市、京都。この場所過去・現在をとらえ直し、その先にある日米のこれからをローカルとグローバル双方の視点から考えていく。

京都サイトは第59回JASCの締めくくりを飾る場所となった。タレントショー、フィールドトリップ、伝統文化体験、そして、一カ月の集大成となる京都フォーラムを開催した。最後に、次回のJASCである第60回のECを選出して、第59回JASCは別れの時を迎えた。

立命館大学衣笠セミナーハウス

第59回日米学生会議は8月13日から8月20日までの京都開催期間中、京都市北区の立命館大学衣笠セミナーハウスに滞在した。ここでは、宿泊のほか、分科会活動、タレントショー、Farewell Party、第60回実行委員選挙を行った。

立命館大学はJASCがここ10年にわたり特別のご好意と協力を得ている大学であり、本会議以外にも、毎年、選考面接、広報などでもお世話になっている。第59回会議も京都開催が決定してすぐ、立命館大学へ依頼することを決めた。

従来JASC日本開催は滋賀県にある、びわこ・くさつキャンパスを使用することが多かったが、京都開催が最終サイトであることを考慮し、京都市内にある衣笠キャンパスの利用を考えた。この施設は、本来、学内生しか利用できないものであるのに関わらず使用の許可を得た。そればかりか、夏期全学休業期間における使用をはじめ、予約の時期、使用期間、利用料金など、数々の特別のご好意をうけて第59回JASCの京都開催は成立した。

この場をかりて、立命館大学、特にJASCの担当であった衣笠国際課の田中清子様へ感謝の意を表したい。

京都サイト準備経緯

第59回日米学生会議を京都で開催することは、第58回会議の最終サイト、サンフランシスコでの実行委員ミーティングで決定した。

一番重要となる宿泊、会議室等の施設は、長年JASCがお世話になっている立命館大学様に依頼した。企画面では、京都の現代と革新を体験するものとして、環境フィールドトリップを、歴史と伝統を体感するものとして観光ならびに伝統文化体験を企画した。1カ月の締めくくりとなるファイナルフォーラムでは、京都の人々との連携できるものを求め、京都最大の学生団体である京都学生祭典とのコラボ

第3章 本会議・サイト活動

レーションを企画した。第59回会議の集大成を発表する場に相応しいものとなるように基調講演者依頼、広報活動や財務活動だけでなく、会場のセッティングや当日のロジスティックス組みなどを行った。

8月13日 広島から京都へ、神戸日米協会レセプション、SPring-8 姫路城見学

【参加者日記】

朝、眠そうな顔をしながら2台のバスへと乗り込んだJASCers。広島に別れを告げ、最終サイトである京都へと向かった。途中で大型放射光施設であるSPring-8を訪れ、第59回日米学生会議では初めてとなる科学に関わる施設を訪問した。神戸日米協会では昼食に美味しい天ぷらとそうめんを頂いたあと、姫路城を見学し、移動日にも関わらずイベントが満載であった。しかし、バスの乗り降り、35度を越える厳しい暑さ、そして長い旅の疲れが蓄積したせいかJASCerが次々とダウンして行き、衣笠セミナーハウスに着くころには皆くたびれていた。その夜、タレントショーの練習をするはずがベッドへと直行し、早々と眠りについてしまった。(武田尚樹)

神戸日米協会レセプション

たつの市の志ん具荘にて、そうめんと天ぷらがメインの食事をいただいた。神戸日米協会会長 キラン セティ氏にスピーチを頂いた。ターバンを巻くインド系のキラン氏は、関西弁のネイティブでもあるが、当日は英語のスピーチであった。ここ、兵庫県南西地方は、揖保の糸をはじめとして全国的にそうめんが有名な土地である。この日の兵庫県における企画は全て神戸日米協会専務理事 井上淳也氏にお世話になった。

SPring-8

第59回JASCで唯一の科学施設への訪問となった。SPring-8は財団法人高輝度光科学研究センターが運営する共同利用型の世界最大の大形放射光施設である。極めて明るく、幅広い波長をもつ放射光を利用し、分析、観察、新物質の創成することを通して、技術開発、生命科学、環境から考古学まで広い分野において貢献をしている。ほとんどの参加者にとって、かなり難解であったようだが、テクノロジー

に興奮するアメデリも多かったようだ。

姫路城

安土桃山時代に築かれた、白漆喰の美しさで、特に天守閣が有名な城である。400年の間、戦火などから逃れ当時のままをのこしており、国宝・世界遺産に指定されている。



姫路城にて

8月14日 環境フィールドトリップ、タレントショー 環境フィールドトリップ

京都は、京都議定書締結の地として世界的に有名であり、その独自の環境に対する取り組みでも有名である。2007年は京都議定書の第一次約束期間が発効され、環境が大きなテーマであるG8サミットが次回日本で開催されるということもあり、日米のグローバルパートナーシップが問われる環境問題はさらに注目をあつめている。東京で行われた世界銀行での環境フォーラムに対し、本企画では京都独自の実際の取り組みを、ビジネス、科学技術、CSRといった幅広い視点からこの問題について考えられるように4グループに分かれてフィールドトリップを行った。京都の企業は、江戸時代から西陣織りなど、手仕事の技術の伝統があり、近代、現代と独自の技術とセンスで東京を飛び越えグローバルに活躍している。現在と未来の京都を知るのに、絶好の機会であっただろう。

1. 関西電力

関西電力京都支店のご好意でバスをチャーターしていただき、京都市東部～琵琶湖沿岸の関西電力施

設を訪れた。そこでCSRのレクチャーを受けるとともに、環境問題とビジネス・生活水準維持という倫理の問題について考えさせられた。

2. 堀場製作所

堀場製作所本社を訪問し、工場を見学しながら環境とビジネスとのありかたについて伺ってきた。堀場製作所は分析・計測機器メーカーとして有名で、特にエンジン排ガス測定・分析装置分野では世界シェアの80%を占めている。

3. 島津製作所

島津製作所は分析技術で環境分野をリードし、ノーベル賞受賞者田中耕一氏を輩出したことで有名である。島津創業記念館を訪れ、江戸末期から現在に至る科学技術の発達過程を学びつつ、京都企業の独自性と世界の環境貢献するに至った過程を学んだ。

4. 京エコロジーセンター

京都議定書が採択された地球温暖化防止京都会議を記念してつくられた、京都市環境保全センターの京エコロジーセンターを訪問した。地球規模の環境問題を学ぶとともに、京都ならではの環境の取り組みを体験してきた。

タレントショー

毎年、JASC本会議の恒例となっている企画である。内容、形式もすべて自由に、自分の自信のある出し物を披露するものである。今年は、歌、合唱、ダンス、ピアノなど音楽に関するものが多かった。参加者たちは、出し物の準備と大いに盛り上がった本番を通じて理解と友情を深めた。

【参加者日記】

時間の経過はとても早く感じ、ついに最終サイトである京都の2日目に突入した。炎天下、盆地特有の暑さが厳しい京都サイトの2日目の午前中、JASCersはグループに分かれて関西電力、堀場製作所、島津製作所、京エコロジーセンターとそれぞれ企業訪問を行った。私は関西電力の企業訪問で、琵琶湖等を訪れながら関西電力の会社のCSR等のレクチャーを受けることができ、貴重な経験をすることができた。午後は、少ない時間のなか参加者が用意したタレントショーが行われた。タレントショーとは、59回の参加者がダンスや歌、ピアノなどという

特技をステージで披露するものである。残念ながら、多くの人が体調を崩してしまっていた中だったので、全員がそれぞれの特技を充分披露することができず残念であったが、それでも多くの参加者がそれぞれの素晴らしい特技を披露してくれた。タレントショーの後は、スペシャルトピックディナーで、私は「日米両方のステレオタイプについて、またJASCによってそのステレオタイプは変化したか」というトピックについて有志メンバーでモスバーガーを食べながら熱い議論をもつことができ、改めてJASCという場が参加者に及ぼす“影響力”を感じた。
(竹内菜緒)

8月15日 京都観光+伝統文化体験

京都の1つの目玉である本企画は単なる観光ではなく、京都の歴史と伝統、その精神やエッセンス、雰囲気まで感じ取ることができればとの思いを込めて企画した。

4つのグループに分かれ京都市内の神社・仏閣、伝統文化体験スポットをめぐり、最後に京都一の繁華街である四条地区で自由に夕食をとった。本企画はでんでんの大きな協力をいただいた。実際のコースは以下の通りである。



伝統工芸体験

1. 金閣寺・二条城コース

立命館大学→金閣寺→二条城→丸益西村屋（京友禅体験）→四条烏丸→立命館大学

2. 清水寺コース

立命館大学→丸益西村屋（京友禅体験）→清水

第3章 本会議・サイト活動

寺→高台寺→四條烏丸→立命館大学

3. 東山コース

立命館大学→銀閣寺→哲学の道→南禅寺→伝統工芸ふれあい館→八坂神社→四條烏丸→立命館大学

4. 嵯峨野・嵐山コース

立命館大学→(京福電車嵐山駅)→中嶋象眼(象眼細工体験)→天竜寺・嵐山散策→四條烏丸→立命館大学

【参加者日記】

8月15日はRTのディスカッションで始まりました。日本の終戦記念日ということもあり、メディアRTでは日本とアメリカのメディア(主に新聞)の日本の終戦記念日に対する報道の違いについて話しました。15日は日本にとって大切な日ですが、アメリカでは特別な日として扱われません。それよりも12月8日の真珠湾攻撃の方がメディアでは大きく取り上げられます。日米の外交や歴史認識の差は、この様なところにも原因があるのではと感じました。昼からは気分一転、京都観光に出かけました。金閣寺の派手ではあるものの品格を漂せる雰囲気アメデリとともに酔いしれました。ディスカッションと観光を通じ、より一層相互理解を深めることのできた一日でした。(土岐吉史)

8月16日 分科会活動(京都フォーラム準備)

【参加者日記】

長かったJASCの日々も、今日を含めとうとう残り四日となってしまった。5月の春合宿に始まる事前活動から、明日のファイナルフォーラムのためにずっと準備をしてきた。そして今日が最後の分科会活動となる。

ファイナルフォーラムの準備に関しては、本会議が始まって以来、メンバーの間で意見が合わず、苦しい思いをするときもあった。しかし今日、メンバー一人ひとりが明日の本番のために力を合わせて取り組んだ結果、全員が納得のいくプレゼンテーション資料を作成することができた。

さすがはJASCerたちだ、やるときはやるな、と感心する一方で、自分はまだグループの活動に貢献できたのではないかという思いを感じることもあ

る。ただ、JASC全体を通じて学び、反省して事をJASCが終わってからも実践していくことが大事なのだと思う。

いよいよ明日がファイナルフォーラム。自分たちの分科会のプレゼンに集中しなければいけないが、他の分科会の発表を聞けるのもまた非常に楽しみである。(上田 来)

8月17日 京都フォーラム

【参加者日記】

第59回日米学生会議の集大成であるファイナルフォーラムが京都市国際交流会館にて開催された。川勝平太氏の基調講演に始まり、京都の学生による活気溢れるダンスパフォーマンス、そして各分科会の成果発表など本会議を締めくくるプログラムが組まれた。分科会発表では、本会議における活動の様子や成果がスキット・パワーポイント・映像など、問題意識や成果に応じて各々のやり方で来場者の方や日米学生会議関係者に向けて発信された。フォーラム後は、場所を移し来場くださった高校生や大学生を交え自由に質疑応答が行われ、本会議の活動を始め日米学生会議についても話す時間になった。フォーラムが終わったこの日、各自思い思いの夜を過ごした。朝7時まで遊びつくすと出かけていった者、翌日の次期実行委員選挙の準備をする者、ソファーで語り合う者と様々だった。日米学生会議が終わりに近づく中、それぞれが想いを抱きながら過ごした夜だった。(渡辺恭子)

8月18日 第60回実行委員選挙、伏見日米学生交流会第60回実行委員選挙

京都フォーラムで59回の正式なプログラムは終わったが、まだ重要な仕事が残っている。この日の午前、次回会議の実行委員に希望する立候補者がスピーチを行い、質疑応答の後、選挙結果の発表があった。フォーラムの翌朝という過密日程ながら、立候補者は一生懸命準備して、自分の思いをスピーチにぶつけた。今回は近年になく多くのデレゲートが立候補したため激戦となった。発表後には悔し涙、うれし涙、祝福の涙、多くの涙があった。新実行委員はその直後から、翌日のFarewell Partyまで次回アメリカ開催に向けたミーティングを行い、他の参加者は

伏見交流会へと向かった。



選出された新実行委員

伏見日米学生交流会

第59回会議のテーマである社会発信と次代の創造は、真言宗の開祖である弘法大師・空海が開設した日本で最古の大学の流れをくむ種智院大学と日米学生会議が共同で、次代を担う京都中の高校生との交流会を催すことで完成をみた。習字（梵字）の実演・体験、納経実演、空海のご思想・四国遍路に関する展示や学生作の宗教的絵画の展示等、宗教の神秘さを感じることができ、日米の両参加者にとって刺激的となった。また、種智院大学の学生や伏見区の高中生と「キリスト教と仏教の違い」の議論が起きるなど、参加者は思い思いの体験を楽しんでいた。その後行われた利き酒大会では、伏見の銘酒に皆感動した。このプログラムを後援いただいた伏見区と会場を提供して頂いた種智院大学、特に挨拶も頂いた学長である頼富本宏様、プログラム運営に大きく協力していただいた種智院大学の古川洋一様ならびに学生スタッフの皆様に感謝したい。

【参加者日記】

猛暑。この日は第60回日米学生会議の実行委員を決める選挙が行われた。それぞれが様々な思いでこの日を迎えた。ある人は熱い情熱をもって、ある人は悩み、不安に駆られながら、ある人は残された日数を精一杯かみ締めながら。そして新たなEC16人が選出された。

午後から新ECはミーティングを行い、残りの参

加者は種智院大学で行われた「伏見日米学生交流会」に参加した。京都の高校生や大学生と交流し、納経実演を見学したり、習字の体験、利き酒大会を行ったりした。夜は仁和寺に宿泊した。広くてきれいな宿坊でリラックスできた。参加者はお酒を飲んだり、語り合ったり、爆睡したりと思い思いの夜を過ごした。（上野良輔）

8月19日 Free day、Farewell Party

仁和寺

世界遺産でもある仁和寺は真言宗の総本山であり、その境内の中にある御室会館という宿坊に宿泊させていただいた。総務部長の沖田定信様のご好意もあり、午前中境内を拝観させていただけることとなり、仁和寺の歴史の長さを実感した。

建仁寺

欧米でも大変有名な禅宗（臨済宗）の寺で、五山派の一角をなす非常に由緒ある寺院である。前夜、仁和寺で宿泊したのち、建仁寺に赴き、貴重な座禅体験をおこなった。

Farewell Party

この夜は参加者全員で過ごす最後の夜となった。衣笠セミナーハウス内でJASC59の71人でお別れのパーティを開いた。2階で食事を取ったあと、1階のホールでパフォーマンス、スピーチをまわしながら、JASC中の様子をまとめたビデオを上映し、1ヵ月が終ることを感じはじめる。60回のお披露目も行われた。明朝の解散まで、思い思いに別れを惜しんだ。

【参加者日記】

アメドリと過ごす最後の日。それぞれがフリーの時間を過ごした。

早朝、建仁寺での座禅。静かに目をつむった私の中には、それまでの思い出が走馬灯のように駆け巡っていた。いよいよやってきてしまった最後の日。寂しさ、楽しい思い出、後悔、満足、未来・・・様々な思いで胸が一杯だった。

みんな最後の一時一時を心に刻み付けるように過ごした。

そしてFarewell。スライドショーを見て思い出を振り返った。国籍もバックグラウンドも違う71人が同じところで爆笑し大変だった時、楽しかった思い

第3章 本会議・サイト活動

出を今、共に分かち合っている。そのことに胸が熱くなった。このメンバーとJASCを作れて本当によかった!と思った。

最後の夜、手紙書き、パッキング、おしゃべりに明け暮れていたら太陽がうっすら顔を出してきた。

(山本詩乃)



仁和寺で浴衣を着たアメデリ達

8月20日 第59回日米学生会議解散、米国側参加者帰国

【参加者日記】

この日は別れの日でした。前日の夜から最後のJASCメールを書き始め、そのまま残りの時を惜しむように夜通し起きていたJASCerも多かったのではないのでしょうか。空港に向かうバスの前で涙を流しながらハグしあったり、握手したり、言葉を交わしあったり…みんな思い思いにお別れをしていました。そんな様子を見ながら不思議と悲しくありませんでした。むしろきっとまた会えると強く確信しました。この1ヵ月間を一緒に過ごした私たちは本当に強い絆で結ばれていると思います。また「やあ、久しぶり」と会える日が楽しみです。みんなありがとう!

(吉川真由)

京都フォーラム

日時：2007年8月17日（金）

会場：京都市国際交流会館 イベントホール（京都市左京区 221名定員）

テーマ

“Advocating Japan-America Participation in Global Change”

「太平洋から世界へ ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～」

企画趣旨

本シンポジウムは本年度の学生会議の締めくくりに開催される。1ヵ月にわたり、理想と情熱をもってぶつけてきた議論、学生ならではの、学生にしかできない議論、しかしながら同時に常に広く社会を意思しながら続けられてきた議論。それを通じて何を成し遂げられたか、できなかったか。成果を参加学生の中だけで留まらずに広く社会に発信する。日米の学生が伝えたことが、やがては京都から世界へと広がることを、そしてその一歩となる場として本フォーラムを開催した。

企画概要

- 12:30- 開会挨拶 日米会話学院副院長ジョンフリーマン氏
- 12:35- 来賓挨拶
京都市教育委員会教育長 門川大作氏
学校法人立命館 総長 川口清史博士
- 12:45- 日米学生会議実行委員長挨拶
- 12:50- 静岡文化芸術大学 学長
川勝平太博士
- 13:20- 第59回日米学生会議概要発表
- 13:50- 日米学生会議分科会発表
- 14:40- 京都学生祭典によるパフォーマンス
- 14:50- 日米学生会議分科会発表
- 15:30- 分科会講評 講評者：日米会話学院副院長ジョンフリーマン氏
- 15:50- 閉会の辞
- 16:20- 交流会
- 17:45- レセプション 来賓挨拶 京都府教育委員会 教育長 田原博明氏

* 同時通訳：安部礼子、河村睦美



分科会発表の様子



レセプションにて

基調講演者

川勝平太氏 — 静岡文化芸術大学学長

早稲田大学政治経済学部卒業後、同大学経済学部研究科博士課程修了。オックスフォード大学哲学博士、早稲田大学政治経済学部教授、国際日本文化研究センター教授を経て、平成19年より現職。故小渕首相主宰「21世紀日本の構想」懇談会委員、国土審議会委員、教育再生会議委員、「美しい国づくり」企画会議委員など幅広く活動している。また、NIRA（総合研究開発機構）理事、京都迎賓館運営懇談会委員、アジア平和貢献センター理事、京都市社会教育委員、京都経済同友会特別会員などを兼務。

京都フォーラムスタッフ

統括 Logistics	安田雅治
統括補佐 Logistics helper	Morgan Swartz、真田雄太
司会 MC	杉山亮太、Andrew Ruffin
受付 Greeter	山本詩乃、角田亜紗子、 本郷亜紀、平井麻祐子
会場案内 Usher	金大鐘、上田来、Hidemi Tanaka
会場誘導 Guide	望月進司、上野良輔
来賓案内 VIP Usher	川口耕一朗、菅家万里江
マイク Microphone	菊池なつみ、廣田隆介
タイムキーパー Timekeeper	Brian Miller、Hiroyuki Miyake
記録 Camera	Justin Long
JASC59サイト紹介スピーチ	東京サイト：呉 宣咏 秋田サイト：Maureen Campbell

広島サイト：James Piller

京都サイト：李 凌毅

レセプション司会

レセプション受付

レセプションスピーチ

安田雅治、真田雄太

三窪英里、菅家万里江

Samantha Scully、加納康宗

メディア掲載

ガクシン記者イベントレポート 2007年9月1日掲載記事より抜粋

(<http://eventreport.kyo2.jp/e28669.html>)

8月17日(金) 59回日米学生会議 京都フォーラム
「分科会の発表と聞くと真面目な形式を予想するかもしれないが、劇っぽくしたり、映像にしたりなど、分科会ごとに発表の仕方にもさまざまな工夫をこらしてあった。10分間という短い時間の中で、長く深く話したことをどう伝えるか。そういう部分を意識して作ったのであろう。わかりやすく、なかなか見て楽しめる発表であった。」

「会議全体を通して感じたのは、日米両国の参加者間の仲のよさである。楽しげに会話するその姿は、分科会に分かれて議論して発表した内容よりも重みのある何かを彼らが得ていたことを意味する。会議で得られた成果を彼らはこれから長い期間をかけて何らかの形で社会に貢献、還元していくのではないだろうか。日本とアメリカの関係、ひいては世界の中で。」

— レポートライター：岩田拓真（京都大学・4） —



ファイナルフォーラムでの講演

サイトコーディネーター後記

杉山亮太

最終開催地である京都は、本当にたくさんの方々の協力を得て始めて成立したものであり、すべての方に心からお礼を申し上げたい。特に、京都担当である安田雅治と真田雄太、ならびに第25回会議OBの寶槻徹氏の協力なしには成立しなかったであろう。お盆という悪条件の中、企業訪問、観光・伝統文化体験、種智院大学での高校生との交流会、公開フォーラムといった充実した企画内容を実現できたことを嬉しく思っている。また、立命館大学の田中様および衣笠セミナーハウスの皆様には多大なるご協力いただき真に感謝しています。京都日米協会の西村様、関西電力の梅田様、京都府総務部長の太田様、伏見区長の水田様、京都府国際課の山口様、京都商工会議所の日野様、神戸日米協会の井上様、島津製作所の天野様、堀場製作所の佐藤様、種智院大学の頼富学長および古川様、でんでんの田尻様や石谷様、仁和寺の沖田様、ガクシンの大久保様・岩田様など名前を挙げればきりがなが、京都におけるプログラムへの協力や相談等非常に親切に迎えていただき、このように本当に多くの皆様の協力をいただけたことを嬉しく思います。ここに名前を挙げきれないほどのたくさんの方々に心から感謝したいです。本当にありがとうございました。

いま思い返すと、実行委員になって一年間、何度京都に足を運んだことだろう。京都にいる時が実行

委員として一番充実した時間であったといっても過言ではない私にとって、京都はもはや第二の故郷となった。初めて秋に京都を訪れた時は紅葉に染まっていたこと、真冬の京都まで夜行バスで行ったこと、選考試験準備の為に春休みを利用して滞在したこと、その後も新幹線とトンぼ返りするように何度も足を運んだことを今でも昨日のこのように思い出される。なかなか思うようにサイトコーディネーターが進まず、苦しんでいた時期もあったが、京都の前回会議参加者やパートナーである安田や真田と共に、夜は京都の町に繰り出し語り、笑いあい、支え合えたことが、私にとってかけがいのない癒しの場となり、京都サイト担当として最後まで全うできたと思う。また、幅広い広報活動の結果多くの応募者の中から関西圏から6名もの参加者ができ、彼らと一緒に広報活動や関係先訪問、あるいは企業訪問を出来たことは有意義であった。

京都は、日本が世界に誇る文化の発信地であり、また伝統と革新が共存している地だと考える。アメリカ人が日本に来るのであれば、その伝統に触れてほしいという思いと、また同時に革新的な部分、たとえば企業の先端技術や環境に対する取り組みを体験してほしいと考えていた。また、京都には多くの大学や宗教団体が存在し、学生の社会的取り組みが盛んであることから、そうした京都の大学生や高校生を絡めた企画を織り交ぜ、「京都日米学生会議」というかたちで第59回日米学生会議の理念であった「社会発信」と「次代の創造」を実現しようとした。

その集大成が「京都フォーラム」であったと考える。200名も入る観客席が埋まっている光景を、司会席から見たときは本当に感動的であった。当初、実行委員間でどのようなフォーラムにするかの見解が全く統一できず、4月に入るまでその形が決められないでいたが、分科会の発表を最大限重視するという方針に統一してからというもの、多くの困難を乗り越えながらも納得のいくフォーラムの形にすべく努力した。京都に着いてからは、疲れから来るストレスや真夏日の気温に加えて、多くの体調不良者や想定外のトラブルの連続にと大変ではあったが、Morgan, Andrew, 安田や真田の協力の下、会

議は最大の危機を乗り越えることが出来た。来賓挨拶に基調講演、分科会発表に演舞披露等すべてのプログラムが順調に進み、ここにきてすべての参加者が第59回会議のすべてを発表するという目標の下にひとつとなり、“59th JASC as a Team”という私の個人的目標も達成されたかのようにさえ思えた。

京都サイトは、このように実行委員達の努力だけでなく、本当に一人ひとりの会議の参加者の努力や熱意、それをサポートしてくれた数え切れないほどの多くの方々の協力をもって初めて成立したのであり、そのすべての方々に最後に心から感謝を伝えたい。本会議終了後、多くの参加者から「京都サイトが一番楽しかった」という声を聞いたことは、彼らへの感謝の気持ちをより一層強くさせるとともに、今後も日米学生会議がこうして多くの人に支えられ、より素晴らしい会議になっていくことを期待させてくれた。

安田雅治

59JASCerの70人に、そして関西地区でお世話になった方々全てに厚く御礼を申し上げるところからこのサイトコーディネーター後記をはじめたい。

8月20日、最終の新幹線で京都駅から実家のある品川駅へ向かった。実行委員としての1年間、京都サイトコーディネーターとしての1年が終わりを迎えた。何度も行き慣れたこの道、また次の月には同じ様に関西に行くのかもしれない。そんな不思議な余韻があった。大体、京都からの帰りは疲れきっていることが多いのだが、この日だけは違っていた。

初めて、実行委員として京都に来たのは前年の10月だった。実はまだ、実行委員の中で正式にはまだサイトの担当は決まっていなかった。この時は、自分の専攻分野の学会で京大にも行っていた。この後、京大に幾度となく来ることになるとも思いもしなかった。もちろん京大だけではなかった。初めての夕食は前年の関西担当実行委員に到着早々案内された中華料理店。京都ではかなりメジャーなチェーン店だ。そこで、都内ではあり得ない、昭和とかアジアの空気に圧倒されたことはいまでも記憶に新しい。そのまた2ヵ月前、前回58回会議の最終日に、San Franciscoで既に京都担当への思いを公言して

いた。

京都の伝統と未来を魅せる。京都の人々との交流を目指す。そして、最終日に多くの涙を演出したい。いくつかの思いのもと、サイトの運営をはじめた。それから、時間はあっという間に過ぎていった。その過程は後悔と自戒の連続だった。京都にいる、関西につながる多くのJASC内外の友人が癒しだった。

今年の京都は記録的な猛暑だった。ただでさえ厳しい暑さで有名なまちなのに。京都に着いてから、深刻な健康問題が広がったため、2～3日の間は立命館でなく病院などにいることが多かった。個人としては、貴重な経験ではあったが、会議の運営をまかされているものとしては、これは危機であり、会議がふっ飛ぶ可能性もあった。不安が不安を呼びかねない心境だった。結果として危機管理が成功したのは幸運なことだし、これもまた、ある意味1年の準備の賜物だったのかもしれない。

京都フォーラムが終わり、会議の終わりが近づくにつれ、フォーラムについて、京都について、会議について、満足と感謝の言葉を聞くと、自分のやってきたことが、正しい部分もあったのではないかと思えてきた。もちろん、各々、会議中考える所があっただろう。必ずしもいい思い出だけではあるまい。しかし、あらゆる意味でつらい経験が会議への思いを強くしていくことは（限度はあるが）、58回の経験上自信をもって言える。新EC選挙結果発表後の多くの涙、解散の時の多くの涙、そしてその後の充実した彼らの笑顔を見て、やっと自分の思いは確信にかわった。

京都サイトコーディネータ活動記録

2006年

10月 立命館大学へ挨拶、宿泊等の施設利用の依頼
【安田】

2007年

1月 立命館大学説明会【杉山】
熊本大学説明会(熊本市)、立命館アジア太平洋大学説明会(別府市)京都市内の学生団体へ参加者応募の広報活動【安田】

2月 大学コンソーシアム京都へ京都フォーラムと

第3章 本会議・サイト活動

広報活動の協力依頼【安田】

- 3月 立命館大学にて参加者選考2次面接、関係各所へサイト準備協力に向けた訪問(京都府、京都市、京都商工会議所、京都市国際交流協会、滋賀県、京都日米協会、神戸日米協会、島津製作所、京セラ、村田機械、堀場製作所、でんでん、仁和寺、立命館大学、大学コンソーシアム京都)【安田、杉山】
- 5月 堀場製作所勉強会、サイト準備への協力依頼(京都市、京都日米協会、でんでん、種智院大学、仁和寺)【杉山】
- 6月 島津製作所勉強会、サイト準備への協力依頼(京都府、京都市、京都市国際交流協会、でんでん、種智院大学、堀川高校)【安田、杉山】
- 7月 京都府内の高校と関西の学生団体へ京都フォーラムと伏見交流会の広報活動、サイト準備への協力依頼(京都府、京都市国際交流協会、大阪日米協会、関西電力京都支店、京都学生祭典)【安田、杉山】



別れの時

